

Dr. ユーバーシャルと甲南学園

出口 晶子

要旨 本論は、甲南学園のドイツ語教育に力を尽くした故ユーバーシャル博士の足跡を、第一次世界大戦後から1965年に神戸で没するまで、主に学園との関わりに注目し、住まい・交友・教育の観点から記憶語り・聞き書き・旧蔵写真・甲南学園史資料等を用いて明らかにしている。一人の人物のライフヒストリーを民俗学的に再構成する方法は、日独交流の時代性や体现された阪神間モダンイズムの諸相を究明するにも有効であることを示した。

- 目次
- 序. 迎れば、ユーバー先生に
 - 1. 一枚の旧蔵写真から—1925年宝塚歌劇場
 - 2. 阪神間の住まい—御影・西宮・芦屋・岡本
 - 3. 甲南学園のユーバー先生
 - 4. 学園葬ともう一つの墓

序. 迎れば、ユーバー先生に

前稿では、甲南学園で長らくドイツ語教育に携わったユーバーシャル博士・Hans Ueberschaar (1885-1965) について、学園の創設者・平生夙三郎の日記(以下平生日記)や新聞、ユーバーシャルの著作、教え子への聞き取り等を通して、およそ①第一次世界大戦前、②戦間期、③第二次世界大戦後に時期区分し、氏のめざした日本学と教育研究の軌跡を論じた¹⁾。生きて語られる民俗学的な聞き書きへの基礎研究として着手したものの、ユーバーシャルについては近代の日独交流史に欠かせない人物とされながら、なお究明されていない部分も多く、日本での活動だけでも時系列に沿って整理検討しておく必要があった。そのため、前稿では第二次世界大戦前後の氏の足跡や、日本での暮らしぶり、甲南学園との関わりについてはわずかにふれるにとどまった。この間、氏の晩年を知るご近所さんや当時の教え子、親友だった有馬頼吉の子孫の方々などからお話を聞き、貴重な資料を拝見する機会をえた。また、甲南学園の所蔵資料を閲覧する機会もえた。その結果、習志野市の「ユーバーシャル博士旧蔵写真」(以下旧蔵写真)の数点は、撮影場所や時期、人物等新たに特定もしくは推定できたものがある。まずお世話になった皆様、諸機関にお礼申し上げる。

「ドイツ語、ドイツをやっていた人は、迎れば、ユーバー先生になる！」

これは、ユーバーシャル晩年の隣家だった前田家の娘さんが、彼の教え子・故西田英樹(甲南大学名誉教授)に他大学でドイツ語を教わった時、「隣に住んでおられた」とたまたま話すと、驚いて放たれた言葉だという。それはまるで旧制甲南高校の教え子・岩本哲が、俘虜生活をユーバーシャルと過ごしたドイツ人にドイツで偶然出会った実験談を思い起こさせる²⁾。本稿では、ユーバーシャルと甲南学園の関係を主にとりあげる。そのため、学生たちが長い名前を縮めて呼んだ「ユーバー先生」、「ユーバーさん」の愛称も適宜用いた。

1. 一枚の旧蔵写真から —1925年宝塚歌劇場

教え子だった甲南大学名誉教授・故黒崎勇が長らく保管していたユーバーシャル博士旧蔵写真は、第一次世界大戦期に俘虜収容所があった千葉県習志野市に2018年正式寄託され、2019(令和元)年9月3日付けで市の指定文化財となった。習志野の俘虜収容所に配属されていた時の関連写真が大半を占めることから、その他の資料群とあわせ、有形文化財(歴史資料)「ドイツ捕虜関連資料」の名で指定されたものである。

この旧蔵写真は126点(以下, 習志野市教育委員会寄託資料は指定末尾番号を明記)あり, 場所と時期が概ね推定できる青島前線・収容所関連は72枚, 全体の約6割にのぼる。残り2割が自身やドイツの家族, 知己など年代の異なる肖像・記念写真で, これには裏書のある写真が数点, また収容所時代の関係写真も若干含まれるとみられる。残りの約2割が彼の概ね日本における写真で, うち撮影場所や年月, 撮影者の裏書があるのは1枚(写真1, No. 93)だけである。幸い, 氏の日本での活動を辿ると, 裏書がない写真も来歴等が少しずつ判明し, 日独文化交流を解くうえで重要資料であることが明らかとなってきた。写真の文化財価値を高めることにつながるため, 本論も旧蔵写真(写真1)から論を進めよう。

「宝塚歌劇場の屋上庭園にて, 1925年3月半ば, 学生T.フジイによる撮影」³⁾。これが, 写真1のユーバーシャルが自筆で裏書したドイツ語の日本語訳である。長かった収容所生活を終えて大阪医科大学予科に復職し, ドイツ語を教えながら, 同大学の医学者・佐多愛彦や駐日大使のゾルフ(Wilhelm Solf)らと日独交流事業を精力的に進めていた頃だった。また旧制甲南高等学校⁴⁾でドイツ語を1924(大正14)年9月から教え始め, 約半年たった頃でもあった(表1)。撮影者・T. Fujiiとはどこの学生(stud.)なのか。甲南学園史資料室の『生徒名簿』等からは, 甲南高校の甲組と乙組の2名が該当する名前として確認できる。乙組はドイツ語が第一外国語であるため, 可能性は高そうである。ただし stud. とあることから, 大阪医科大学等の大学生だった可能性を考える必要がある。1927年大阪医科大学(編)『大阪医科大学一覽』には, 予科講師にユーバーシャルの名, そして卒業生・在校生含めてT. Fujiiと読める名が1名確認できる。特定にいたっていないものの, 少なくとも写真からは, 彼が学生との交流を教室の中だけに留めていなかった事実がうかがいあがる。つまり写真1は, ユーバーシャルの一貫した教師像を示す一枚なのである。

では, どんな公演が上演されていたのだろうか。毛利眞人は, 『貴志康一—永遠の青年音楽家』で「1925年(大正14)3月, ミラノ・スカラ座とサン・カルロ歌劇団から歌手を抜擢したというふれこみのカーピ歌劇団が上海から来日し, 東京公演のあと, 宝塚大劇場で7曲のグランドオペラを上演した」⁵⁾と記している。イタリアのカーピ歌劇団は, 2度目の来日で, 1925年3月20-29日に宝塚で公演していた⁶⁾。彼らはこのグランドオペラを鑑賞したのではなかったか。甲南同窓生



写真1 宝塚歌劇場・屋上庭園でのユーバーシャル
1925年3月中旬, 学生・T.フジイ撮影
(旧蔵写真: No. 93, No. のある旧蔵写真はいずれも習志野市教育委員会寄託資料)

の回顧によれば, ウィーンフィルハーモニーの来日時にも彼は宝塚劇場を訪れていた(表3②)。そこには「新しい若々しい学生にとり囲まれて, 逞しかったあの頃とちがって, 温和な好々爺」となった彼の姿があった。

貴志康一とユーバーシャル

ここまで述べてきて, 早速確認しておきたいことがある。それは旧制甲南高校で学んだ音楽家・貴志康一(1909-37)とユーバーシャル, 宝塚劇場との接点である。1925年当時, 宝塚劇場では, オーストリア出身のヨーゼフ・ラスカ(Joseph Lasca)が迎え入れられていた。根岸一美の『ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団』によると, ラスカは戦前の関西に12年滞在した指揮者であり, 作曲家であった。宝塚音楽歌劇学校の教授を務めるかたわら, 少女歌劇の楽団員からなる宝塚交響楽団を指揮し, 定期演奏活動を通じてヨーロッパ音楽を広めていた⁷⁾。そのラスカのもとでレッスンをうけていたのが, 当時旧制甲南高校の生徒だった貴志

表1 ユーバーシャルの住まいと職場 網掛けは海外滞在時期

No.	年代	居住地	職・その他関連事項	出典
	1911年7月(26歳)-		大阪高等医学校に独逸語講師として招聘される	注1) p. 289; 注21) pp. 240-241
	1912年頃	大阪	学位論文の前書きに、「大阪」と記載	注1) p. 290 (表1 ①)
①	1914年頃(29歳)	大阪 浜寺	「●夢の様です=俘虜の大阪高医独逸語教師=(略) 二十一日午後三時十四分に大阪を通過して品川に向つた一行中にドクトル・ユーベルシャルといふ総督の通訳を勤めて居つた名物が居る(略)「大阪」の声を聞くなりヂッと窓外を眺めて居た氏は僕の顔を見るなり「オゝ」と声を挙げて(略)」記者を見つけた。氏は3年有余、「同校生に独逸語を教授し浜寺に仮寓して居つた ▲生徒に好しく(略)「学校の生徒が一人も見えませぬね」と群がる群衆を見廻しながら自分の教へて居た生徒の事がやはり気になるらしく問ふ「そりや今日は土曜だし誰だつて貴君がこの車で通る事は知りませぬよ」といふと「先生方や生徒諸君にくれぐれもよろしく伝えて下さい、私はどうしても、も一度あの浜寺に言つて日本ボートを漕いだり、泳いだりしてみたいです…」	『大阪朝日新聞』1914年11月22日
	1914年8月-11月(29歳)	中国 青島	ドイツ軍に志願 第3海兵大隊参謀本部通訳・予備陸軍中尉	注1) p. 291; 瀬戸武彦「青島ドイツ軍俘虜概要—その事績・足跡」 http://koki.o-oo7.jp/Kriegsgefangene_seto.htm 【2023.11.27閲覧】
	1914年11月-1915年9月(29-30歳)	東京都 浅草本願寺 俘虜収容所	俘虜生活	注1) pp. 291-294
	1915年9月-1919年12月下旬頃(30-34歳)	千葉県 習志野 俘虜収容所	俘虜生活	注1) pp. 293-299
	1920年1月頃-1931年頃(34-46歳)		大阪医科大学(前大阪高等医学校)予科に復帰, 1923-30年度の科目は「独逸語・心理学」とある。1925年当時のユーパーシャルの外国人講師の年手当は7200円と相当な高給であった	注1) p. 301; 注21) p. 533; 注58) pp. 190-191
	1922年秋-1923年春(37-38歳)	ドイツ	大学から半年の賜暇	注1) p. 302
	1924年8月31日-1932年3月31日(39-47歳)		旧制甲南高校 独語講師	『甲南学園職員勤続調 大正7年12月20日設置以降』
	1925年4月-1927年5月, 1927年8月-1932年3月		京都帝国大学文学部 独逸文学講師。1929(昭和4)年度の場合, 第二講読を週3時間, 「ゲーテ: 西東詩集」, 「ゲーテのバラード」, 「ヨアヒム: 父と息子」の題目で担当している	文部大臣官房秘書課1925-26『文部省職員録』; 『昭和4年度・京都帝国大学文学部講義題目』p. 21; 『京都帝国大学一覽』1927-32; 注55) p. 265
②	1925年-1926年頃	兵庫県武庫郡御影町篠坪1370	京都帝国大学文学部欄の外国人講師名簿に記された1925・26年10月現在の住所。笹野坪とあるのは篠坪と思われる。同資料の1927年以降の住所は③と同じ	文部大臣官房秘書課1925-26『文部省職員録』
③	1927年頃-1932年3月頃	兵庫県武庫郡夙川大社村北連毛846-2	ユーパーシャルはここから京都大学等にも通った。近所の北連毛847には根津家の別荘があった。その別棟には1931年11月-翌年2月まで谷崎潤一郎が住んでいた	1927年・1928年10月・1930年8月・1931年9月調『会員名簿』甲南高等学校同窓会; 『昭和4年度・京都帝国大学文学部講義題目』p. 54; 注31) p. 218
	1927年5月-12月(42歳)	欧米	佐多愛彦の日独文化親善旅行に7か月同行	注1) p. 302; 注21) p. 590
	1930年-1931年度		旧制浪速高校 講師。1930年の月手当は160円, 1931年月165円。同校は, 大阪医科大学予科を発展解消して1926年に開始された大阪府立の旧制高校だった	注58) p. 193
	1930年-1931年度		大阪商科大学(のちの大阪市立大学)予科・高等商業部講師 市立高等商業学校から1928年に昇格。月手当は1930年月100円, 1931年同200円	注58) p. 199

1932年4月-1937年 (47-52歳)	ドイツ ライ プツィヒ大学	1932年3月10日神戸出港, 4月ドイツ着, ライプツィヒ大学日本研究所で日本語を教える。『甲南大学新聞』には「1932年, ドイツ政府の要請で, 母校ライプツィヒ大学日本語学教授となり帰国, さらに, 日本文化研究所を設立, その初代所長となる。しかし, ナチスのやり方が気に入らず, 居づらくなったので1937年, カバン二つで再び日本にやってきた」とある	1932年5月調『同窓会・校友会会員名簿』甲南高等学校同窓会・同校友会雑誌部; 『甲南大学新聞』118号, 1965年3月27日
1938年3月 (53歳)	兵庫県西宮市 阪急夙川	ユーバーシャルの再来日後, 映画監督チールスが彼を頼って来日したときの記事に「今春三月, 阪急夙川に滞在中の元阪大, 京大のドイツ語教師ユーベルシャル」とある。この時期は, まだ講師にはついていなかったとみられる。住所は④と同じか?	注1) p. 293, 表2⑧; 『大阪朝日新聞』1938年8月12日
1939年頃-1942年3月 (54-57歳)		天理外国語学校 独語講師 天理中学校講師	『故ユーバーシャル教授告別式』資料; 天理外国語学校『天理外国語学校一覽』(昭和15・16年度)ほか
1939年11月30日-1945年12月31日 (54-60歳)		旧制甲南高校 独語講師	『甲南学園職員勤続調 大正7年12月20日設置以降』
④ 1940年頃	兵庫県西宮市 夙川 パイン クレスト ホ テル内	滞在型郊外ホテル	1940年6月調『同窓会校友会会員名簿』甲南高等学校同窓会・甲南高等学校校友会
終戦直後		駐留軍の日本語教師	『甲南大学新聞』118号, 1965年3月27日
1947年3月31日-1951年3月31日 (62-66歳)		新制甲南高校 独語講師	『甲南学園職員勤続調 大正7年12月20日設置以降』
⑤ 1947年頃-	兵庫県芦屋市 三条町8	この頃から犬を飼っていた (下記『甲南大学新聞』14号, 1955年1月24日参照)	1947年8月調『卒業生・在高中生名簿』甲南高等学校同窓会・甲南高等学校校友会
1951年4月1日-1952年9月13日 (66-67歳)		甲南大学 独乙語講師	『甲南学園職員勤続調 大正7年12月20日設置以降』
1950年3月25日	兵庫県芦屋市	「日本でのドイツ人医学者: フリッツ・ヘルテル」の論文末尾に「芦屋(日本)」とドイツ語で記載	注1) p. 290 (表1⑱)
1952年9月14日-1965年1月21日 (67-79歳)		甲南大学文学部ドイツ文学科教授 独乙語・独乙文学 (1962年よりドイツ語・ドイツ文学に改称)。1953年12月-1957年頃, 大阪大学文学部講師 (ドイツ文学史) も兼任	『甲南学園職員勤続調 大正7年12月20日設置以降』; 『甲南大学新聞』14号, 1955年1月24日; 大阪大学(編)1956『大阪大学二十五年誌』p. 91
⑥ 1951年頃-1953年頃 (68歳)	兵庫県芦屋市 西山町48	甲南大学 講師・教授時代	『教職員名簿』綴り
⑦ 1953年頃-1965年1月21日没 (68-79歳)	兵庫県神戸市 東灘区本山町 岡本字高井64	甲南大学 教授時代	2021年聞き取り; 注4) 甲南学園50年史出版委員会, p. 117; 『職員名簿・甲南学園』1960年5月ほか
1955年 (69歳) 「甲南のシンボル ユーバーシャル教授」	同上	「コレ私ノアルバムデス。コノ写真ダレカワカリマッカ? 羽左エ門ト私デス。コレ菊五郎デス。私日本芝居大好キデス。(中略) コノ写真私ノ父, 商人デシタ。コレ妹デス。妹二人今東ドイツニオリマスネ。ドイツニハ書物ヤ家具ガオイテアリマスガ東ドイツ政府返シテクレマセン甲南ノ印象デスカ? ソウデスネ, ココノ空気私大好キデス。(中略) 私ハ今学校ノ近クニ住ンデイマス。現在ハ大阪大学ヘモ教ヘニイッテイマス, 家来二人オリマス, ソレハ女中サント犬デス犬ハ二匹イタノデスガコノアイダー一匹ガドコカヘ行ッテシマイマシタ。八年間モーショニイタ老犬デオソラクモウカヘッテコナイデショウ。(中略) 私登山トヨットヨクヤリマス。アアソレカラサーカスガ大好キデス。将来デスカ? 東ドイツヘモ帰レマセンシヤハリココニ居タイデス。」	『甲南大学新聞』14号, 1955年1月24日
1965年 (79歳) 没-現在		六甲山系・再度山の神戸市立外国人墓地に眠る	注1) p. 313

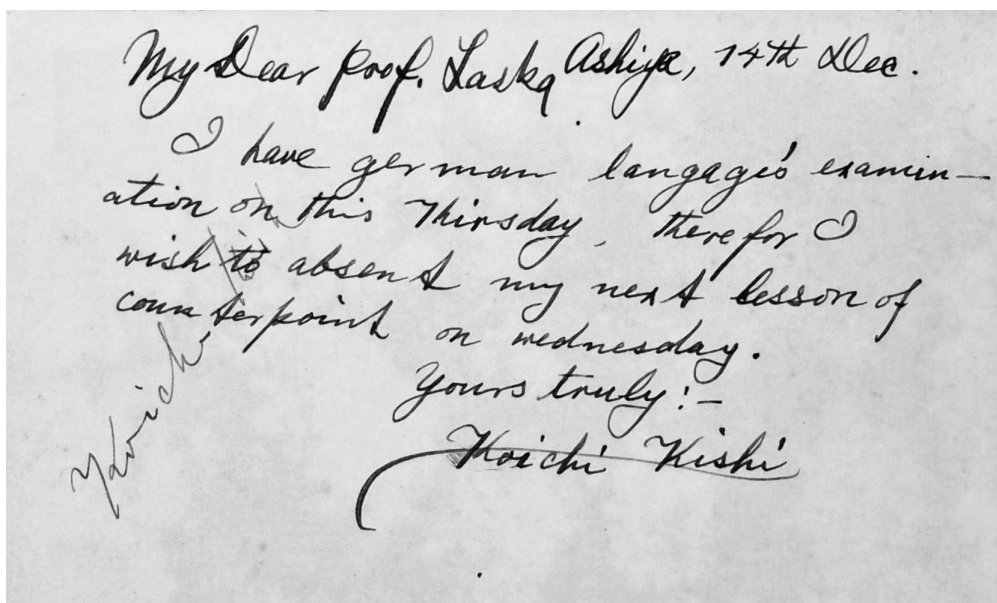


写真2 ラスカ宛の貴志康一のハガキ（1925年）

甲南学園貴志康一記念室蔵 2023年9月撮影

康一である⁹⁾。彼が甲南高校・高等科文科乙類に入学したのは1925（大正14）年4月⁹⁾、乙類は1年からドイツ語選択のクラスだった。高校の在籍期間は1年8カ月、1926年12月3日には当時の校長・丸山環あてに「一身上の都合ニヨリ」退学願¹⁰⁾がだされ、その後スイスやドイツの音楽院で学んだ。そして日独を行き来するヴァイオリニストとして活躍し、ベルリン交響楽団でも指揮をふった¹¹⁾。28歳で天逝するまでに、作曲や映画製作、演劇や評論に加え、自働着火煙草容器の開発特許など様々な領域でその多才ぶりを発揮した。

甲南学園貴志康一記念室（以下記念室）には貴志が宝塚のラスカ宛に認めた、消印と日付のない、投函されなかった英文ハガキがある（写真2）。根岸が指摘するように¹²⁾、貴志の入学年次に照らすと時期は1925年となる。文面からも1925年12月14日（月曜日）であれば、17日（木曜日）は今週であり、この日にドイツ語の試験があり、前日16日（水曜日）の対位法レッスンは休ませてほしい、となる。問題は、ハガキが手元に残った理由である。さし迫った今週の試験を前に、彼はレッスンを休んでも、ドイツ語の試験勉強を優先したい気持ちにかられていたのではなかったか。しかし観念したのだろう。左には薄く、落書きのような、斜めの Koichi のサインもある。では当該のドイツ語の先生とは誰だったのか。断定はできないまでも、筆者は1924年2学期から旧制甲南高校のドイツ語講師に採用されていたユーバーシャルの可能性が高いと推測している。25年当時日本人のドイツ語教師は池山栄

吉ら3名がいたが、ドイツ人教師は彼だけだった¹³⁾。貴志の学年は文科34名の入学生で、ドイツ語を第一言語とする乙類は12名、本場ドイツ人の授業は重要だったろう。ユーバー先生の発音指導と試験の厳しさは、だれもが口をそろえるほどだった。二人の関係性がわかる直接の資料が確認できるのは、少し後になってからのことだが、日独交流につながる最初の出会いは、甲南高校でのドイツ語教師と乙類生徒の関係から始まっていたと思われる。貴志は尋常科4年と甲南高校2年には学内で芸術部委員を務めていた¹⁴⁾。記念室には、貴志が設立構想した1931年の日本芸術協会の起案書がある。そこには計画の柱となる雑誌『櫻』の刊行において、独乙語訳担当にユーバーシャルの名がある。その起案書のベースとなる、貴志直筆とみられる関西芸術協会のメモ書きにもサクラ雑誌の英独仏の訳出に「約なるせ ユーバーシャル、ビーバー、クラツグ」とある。これが実現されることはなかったが、その構想の早い段階からユーバーシャルの参画は企図されていたのである。

貴志康一とゾルフ、佐多愛彦

1926年末、スイスに旅立った貴志は、1928年には拠点をドイツのベルリンに移した。貴志のベルリンでの活躍時期は、駐日大使だったゾルフが1928年末で任期を終え、ベルリンに戻って活動していた時期に接続する。とくに1930年代に入ると、貴志は日本人・日本文化を強く意識した活動を展開していった¹⁵⁾。

改めて前稿の旧蔵写真(No. 85)を見てほしい¹⁶⁾。そこには恰幅のよいゴルフを真ん中に、和服姿の朝日新聞社・社主の村山龍平、佐多愛彦、ユーバーシャール、北里闌らが並んで写る。時期はゴルフが帰国する前、1928年末頃と推定される。前稿段階では場所まで特定できていなかったが、その後背景にある書院造りの建物から¹⁷⁾、藤井厚二が設計した神戸市東灘区御影の村山龍平自邸、和館の庭だと気づいた。現在は長期休館中だが、香雪美術館として運営される村山邸は、明治末から大正期の建物と庭園を含めた「旧村山家住宅」として、2011年に国の重要文化財の指定をうけている。写真の背景は、1918(大正7)年上棟とされる新しい建物部分であり、南側に広縁を付し、書院棟の北に長い廊下で連なる茶室棟があった。つまり会の主賓はゴルフ、催主は村山龍平であり、村山は茶室のある私邸に、日本の伝統文化に造詣の深かったゴルフを親しかった日独関係者やその家族とともに純日本風にもてなしたのであろう。20年代にこうした日独の緊密な交流関係を公私にわたって築いた彼らの人脈は、30年代には、次代の若い担い手育成に振り向けられた。貴志は、ユーバーシャール・ゴルフ・佐多らが築きあげた日独交流の人脈を活かし、戦間期に活躍した音楽家であった。写真1は、教え子による一見平凡な記念写真でありながら、裏書を辿れば、後の日独交流に通じる扉が開かれていたことに気づく。

2. 阪神間の住まい

—御影・西宮・芦屋・岡本

ユーバーシャールが日本で住まいしていたのは、六甲山麓の阪神間エリア、主に阪急沿線の御影・西宮・芦屋・岡本の地である(図1)。大阪高等医学校・大阪大学、甲南高等学校・甲南大学、京都帝国大学、天理外国語学校などに勤務した彼にとって、健康適地の郊外住宅として開発されつつあった阪神間は、通勤にも住むにもちょうどよい場所だったとみられる。とりわけ芦屋は、かねてより佐多愛彦が医学的見地から開発に力を注ぎ、かつ旧友の医学者・有馬頼吉が住んでいた場所でもあった。

芦屋の開発と佐多愛彦

「汗の大阪から涼しい神戸ゆき」¹⁸⁾。これは、阪急電車が開通してまもない1920年代に沿線案内のポスターで使われたコピーである。煙たなびく「働く大阪」から健康的な郊外の行楽地へ、公園に温泉、夏山登山に

海水浴、冬はスキーと春夏秋冬人々を誘った。

1908(明治41)年には阪神電気鉄道会社が『市外居住のすゝめ』と題し、序と結以外、佐多愛彦をはじめとする医学者、病院関係者がすべて口演・記述する冊子を刊行している。打出浜の引き網風景や西宮海水浴場など風光明媚な写真を盛り込んだ巻頭には、佐多が「大阪の如き不健康地に居住する肺病者には転地は最も必要だ」¹⁹⁾として医学的見地から一家での郊外居住を説いた。明治中期、内務省衛生局や医学者の後藤新平らが西洋の海水浴の効用を説き、阪神間の海水浴場の開発がいち早く進んだように²⁰⁾、明治末から大正期の保養地から郊外住宅への転換には、こうした医学関係者の言説がすぐれて説得的だった。

佐多自身「土地を愛し郊外の事情に通じ」、阪神電車が開通するや、いち早く沿線を踏査し、当時「無名の一部落であった芦屋」²¹⁾に着目して、山麓の数反の土地を買った。そこに脩竹三竿の茅屋を営み、同地の小学校校長とも相知りになると、佐多に土地の購入をもちかける村民も増え、購入した土地は30年余りで2万坪にのぼったという²²⁾。佐多は、1901(明治34)年の結婚後、大阪北区絹笠町や曽根崎などに住まいしていたが、1912年の洋行のおり、留守宅を芦屋に移して子どもたちを住ませ、学校に通わせた²³⁾。その後上下水道や道がつけられ、松風山荘の名で住宅地としての整備が進んだ。芦屋川沿いの丘陵に建つヨドコウ迎賓館²⁴⁾の土地もかつては佐多の地籍だった。大正期に灘の酒造家・山邑太左衛門が購入し、アメリカの近代建築家・ライト(Frank Lloyd Wright)が建物を設計した。その後の保存修復のおりに見つかった長い礎石上部には「大阪佐多」と刻まれる(写真3)。記名の通り、佐多は、大阪北区堂島北町にも家を持ち、自身はそちらを本邸としていた²⁵⁾。以上のように芦屋の「山に近き所」は、ユーバーシャールが来日する以前から佐多が深く関わった場所だった。佐多の書生を長く務め、ユーバーシャールの旧友だった結核病理学者の有馬頼吉もまた、芦屋の「海岸の広々たるところ」に2500坪の住居をかまえ、家族たちで暮らしていた。

平生日記のユーバーシャール

甲南学園の創設者・平生夙三郎は、社交クラブである大阪倶楽部等でその設立当初から佐多愛彦とは深い交わりをもち、日記にもしばしば登場させている²⁶⁾。他方、ユーバーシャールとの関係については、前稿段階ではまだ関連個所を発見できていなかった。脱稿後に公刊された日記の補巻で、「Überschal」²⁷⁾の名が1929



写真3 「大阪佐多」の文字を刻んだ礎石
 ヨドコウ迎賓館蔵 明治末佐多愛彦の所有地だった
 ことを示す碑 2023年5月撮影

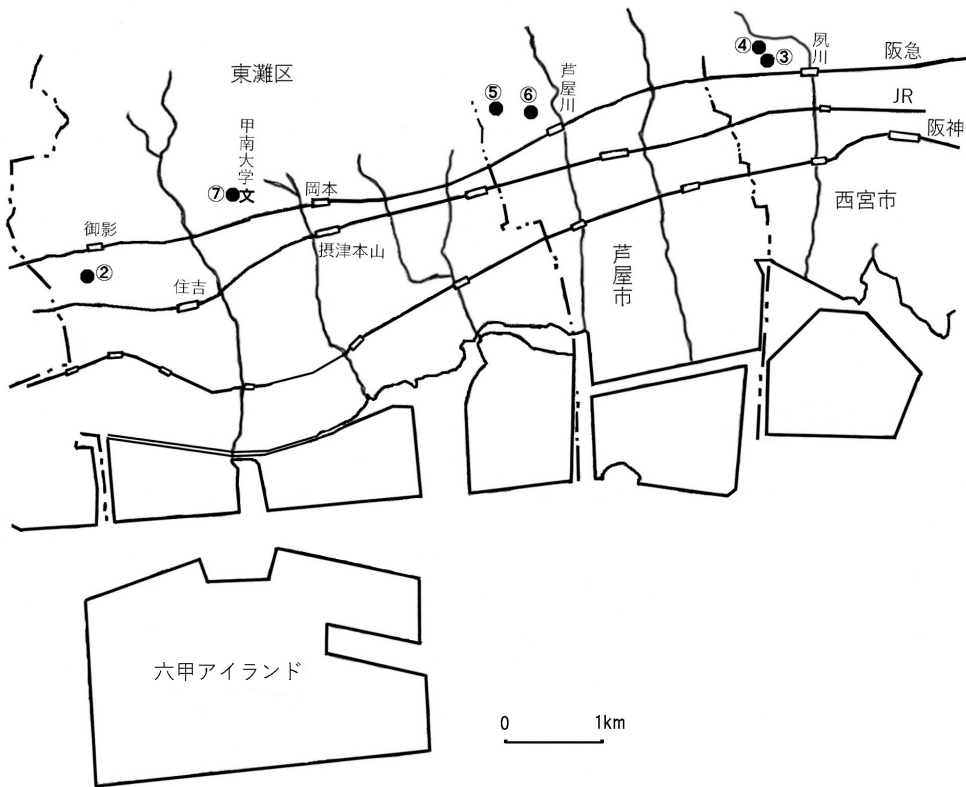
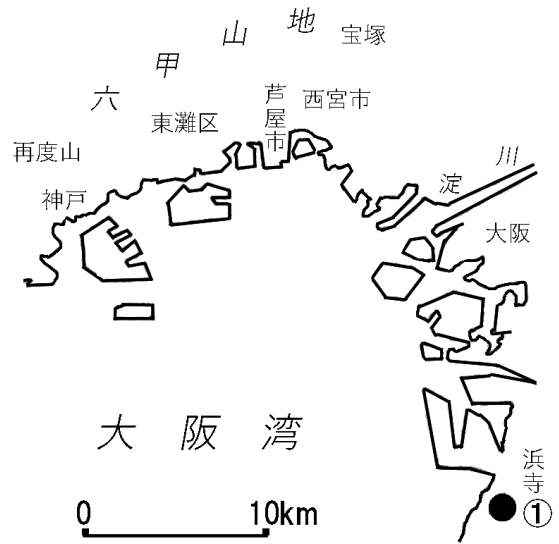


図1 ユーバーシャールの住まい
 図番号は表1の番号と対応

年10月31日に登場することがわかった。全巻を通じて彼の名は、この1カ所だけのようである。平生の目からみた彼の位置が伝わる部分で、かつ本論の展開にも重要であるため補足しておこう。

1929年10月30日夕、佐多愛彦博士がドイツの遺伝学の泰斗 Goldsmith 博士を大阪倶楽部の晩餐会に招待しており、平生は陪賓として招かれた。来賓は主賓をはじめドイツ領事、その他知名のドイツ人として「大阪医大ノ Hartel 博士及 Überschal 氏」、日本人側は大阪毎日新聞の本山彦一、大阪時事新報社の土屋元作らのほか、東京帝国大学で独文を修め1924年から旧制甲南高校の校長を務めていた丸山環らが出席していた。ユーバーシャルは晩餐会当時、すでに甲南高校のドイツ語を教える外国人講師だったにもかかわらず、平生は、佐多とつながる大阪医大の知名のドイツ人として日記には記している。「大阪医大ノ」とあるのは、彼の渡日から続く佐多との子弟関係からみて自然な認識だった。しかし戦中・戦後を通じ、甲南学園との関係は、日記には直接表れないまま深まりを見せ、「甲南学園の」ユーバー先生となっていくのである。

御影・西宮・芦屋・岡本

ユーバーシャルの日本での居住地は(図1)、第一次世界大戦前は、大阪南部の海辺の保養地・浜寺だった(表1①)。1914年東京の俘虜収容所に輸送される途中の大阪駅で、列車の窓越しから知り会った朝日新聞の記者を見つけて会話をした記事によれば、彼は「浜寺の仮寓にもどり、もう一度和船を漕いだり、泳いだりしてみたい」と語っている。

浜寺は、明治後期より別荘や大邸宅が並ぶ保養地で、外国人も多く居住していた。ジャーナリストの宮武外骨が、大阪毎日新聞・社主の本山彦一の薦めで大阪の煤煙を離れて空気のよい浜寺で生活を始めていたのも同じ頃である²⁸⁾。ユーバーシャルが勤める大阪高等医学校は当時大阪・中之島にあり²⁹⁾、通勤に適し、かつ空気のよい浜寺が仮住まいとして選ばれていたのだろう。しかし佐多は、浜寺より阪神間のほうが居住適地とみていた。彼は『市外居住のすゝめ』のなかで、「大阪神戸間の或る沿岸は浜寺附近の沿岸よりも其向きが宜いと思うて居ります」と表現するように、転地には風向きと家の向きが重要であり、家はなるべく南向きがよいが、西向きに建てなければならぬところは風が激しく、あまりよろしくない。つまり、阪神間の「山に近き所」、「海岸の広々たる所」が浜寺よりもよい場所とし、家は粗末でよいからそういう場所

へ「転居されたき」とした³⁰⁾。ユーバーシャルにとって浜寺が「仮寓」だったのは、阪神間への転居を意図していたからではなかったか。以下それを裏付けるように、資料から辿れる彼の住まいはいずれも阪神間である(表1②-⑦)。

②兵庫県武庫郡御影町篠坪1370 現在の神戸市東灘区御影1丁目のあたりで、阪急御影から南へ徒歩650mほどの距離にある。阪神急行電車の名で呼ばれた阪急電車は1920年に開通しており、夙川・芦屋川・岡本・御影駅ともに同年の開業だった。1925・26年の『文部省職員録』には京都帝国大学文学部の外国人講師として彼の名があり、この住所が記載される。旧制甲南高校までは歩いて2キロ、30分ほどなので、あえて電車に乗らずとも、健脚の彼にとっては苦にならない距離だったろう。

③兵庫県武庫郡夙川大社村北蓮毛846-2 北蓮毛の住まいは、現在の西宮市雲井町で、阪急夙川の北西徒歩6分ほどに位置する。駅から近く、大阪・神戸への通勤にも便利な場所で、1927-32年初めのドイツ出発時まで住んだとみられる。1931年谷崎潤一郎が3か月半の間仮住まいしていた根津家別荘別棟(北蓮毛847-110及び15)³¹⁾とは、程近い距離にあった。根津家別荘は、大阪の繊維問屋として栄えた根津商店の清太郎が所有し、そこには画家の小出樞重もしばしば出入りしていたことで知られる。根津家は、ユーバーシャルの渡独時期には手放されているが、一帯は関西の富豪や文人、外国人が多く住むエリアだった。

④パインクレスト・ホテル ドイツから戻り、旧制甲南高校でドイツ語講師に復帰していた1940年には、西宮市夙川(現在の殿山町)のパインクレスト・ホテルが住まいだった。ここは阪急夙川駅から北西徒歩10分の山の手に建つ、1931年(昭和6)³²⁾に開業した短期宿泊と長期滞在を兼ねたホテル形式のアパートである。北蓮毛のかつての住まいからも200m余という近さにあった。同年に作製された吉田初三郎の『西宮市鳥観図』にはこの建物が名前入りで登場する³³⁾。欧米にあった「ホテル暮らし」という住まい方が提供され、外国人や上級公務員、貿易商、銀行員などの長期出張者や文化人が好んで利用した。同ホテルが刊行していた冊子『パインクレスト』によると、60の客室に食堂、ホール、社交室があり、料理教室や日本舞踊、書道、俳句の会といった文化的な催しも定期的に開催されていた。単発の宿泊もできるが、長期の利用契約は月貸しであり、富田が有するパンフレットでは、月貸しは室料の2か月分を敷金とする規約だったという³⁴⁾。

『パインクレスト』41号には、開業4周年を迎えた1935年4月と5月の成績表が載る³⁵⁾。これを見ると、長期契約の客が圧倒的に多く、客室は満杯で大いに繁盛しているのがわかる。なぜ、繁盛するのか。支配人の金子六郎が分析するには、理由は中庸を歩んでいるからだという³⁶⁾。つまり大阪と神戸の中間的な立地／人家も少なく静かな松林だが、かといって寂しい場所ではない／鉄筋と木骨の建物／設備からみて高くはない室料／一時は取り入れてみたものの利用の少ない乗合自動車はやめて、運動がてら駅まで歩くのに健康的な距離／娯楽は囲碁・将棋など騒がしくならない程度のもを配備／おいしいと評判の食事は安くなく高くもない値段、と中庸をえたサービスに徹することで、真面目な客が多く、たとえ不真面目な客でも周囲におされ真面目になるのが当ホテルだと述べる。

「松山の中灯ともつて来る誰れかゞ洗つてくれた枕掛スチームにかはき³⁷⁾。同社交室で開かれていた俳句の会の『松丘句集』にも中庸の心地よさは、追憶の句として謳われていた。

なお、ユーバーシャール再来日後の1938年の新聞記事には、住まいが阪急夙川とある。「カバン二つ」で戻ったその頃から彼はここに住んでいた可能性も考えられる。戦後は、連合国の進駐軍に接収され、女性将校の宿舎となっていた³⁸⁾。同ホテルの接収年月日は1945（昭和20）年9月20日と早く、解除は1954（昭和29）年5月3日と長きにわたった³⁹⁾。1947年10月29日、兵庫県内の被接収ホテル経営協議会が設立されると、その幹事として同支配人・金子六郎が名を連ねている⁴⁰⁾。しかし、解除後は太陽神戸銀行の寮になるなど、通常のホテル営業が継続することはなかった。つまり1945年までの10数年という短い営業期間のなかで、ユーバーシャールは阪神間モダニズムの盛衰を経験していたことになる。

⑤芦屋市三条町8 ここは戦後1947年の住まいとして表れる。すでに還暦を過ぎたユーバーシャールが新制甲南高校の講師として引き続きドイツ語を教えた時期である。ドイツに戻らない覚悟で選んだ住居とみられ、この頃より犬を飼っている。最寄りの阪急芦屋川駅から徒歩13分程の北西の高台に位置する住居だった。

⑥芦屋市西山町48 1951-53年頃の住まいである。甲南大学教授となっていた時期であり、阪急芦屋川から徒歩数分の距離で、⑤よりも駅に近かった。

⑦神戸市東灘区本山町岡本字高井64 甲南大学の北西部、現在の西岡本5丁目に位置し、ここが彼の最後の住まいであった。大学まで徒歩5分弱、岡本駅から

は徒歩15分余の距離にあり、大学に日々通うことが最優先された「山に近き所」だった。年齢は70歳に近づいていた。氏の日常が聞き取りできるのは、この場所からである。彼の旧蔵写真には角度の異なる同じ家屋写真が2枚（No. 77, 78）ある。平屋建てで、庭側には段になった沓脱石と犬小屋がある。彼の晩年を知る隣家の前田光弘氏（1948年生）に見てもらくと、「こんな家だった」という。家屋が新しいことから、撮影時期は1950年代半ば頃とみられる（写真4）。この付近は、太平洋戦争の最末期、焼夷弾が落とされ、焼け野原になった。

「8月3・4日頃、ビラで明日芦屋、西宮山手に落とすから気つけろ、そのとおりですね。6日の朝5時頃かな、ズーときてね、焼夷弾攻撃、徹底的に山に落としました。」

1945～50年頃の国土地理院の空中写真⁴¹⁾を見れば、元は人家だったのだろうが、更地になった場所がいくつもある。甲南高校や灘高校、本山第一小学校など学校の敷地ははずされた。むろん「誤射」もある。戦前から近くに住む正田日出夫氏によれば、あとで見に行くと甲南高校（現在の甲南大学）の敷地内の畑にも多くの焼夷弾が落ちていた。

前田家がこの地に戻れたのは1953年頃だった。おそらくその少し前頃にユーバーさんは引越してきたのではないかという。1軒家に住むユーバーさんはキミとタロという2匹の犬を飼っていた。前の小道を、「キミちゃん、キミちゃん」と呼びながら歩いて帰ってくる。ある日、前田さんの一番下の妹（1955年生）が3歳くらいの時、ユーバー家の犬に飛びつかれて背中をひっかかれたことがあった。夜「日佐子ちゃん、ゴメンナサイ」と謝りにこられ、オレンジジュースを置いていかれた。写真の犬小屋と符号する日常の細部である。

近くには、外国人が多くいた。ドイツのヘルマン⁴²⁾さんはシーメンスの兵器会社の極東支配人で、その邸宅が、住吉川左岸の丘上に戦後も廃墟になって残っていた。廃墟は近所の子らの探検の場所だった。大阪の領事の豪邸だったところもある。スウェーデン人もいた。ドイツ人のシュネルさんは戦闘機や兵器を作るメッサーシュミット社に勤めていた。独身だったが、子供には人気があった。一方のユーバーさんといえば、近寄りたく、子供に人気があるというタイプではない。俯きかげんに人と目をあわすことなく、大学からぶつぶついいながら自宅に帰ってゆく。身の回りの世話は、お手伝いさんがしていた。「家来二人オリマス、



写真4 ユーバーシャルの自宅

1950年代半ば頃の撮影で、最後の岡本の住まいとみられる。家屋・犬小屋が新しい
(旧蔵写真：No. 77)

ソレハ女中サント犬デス」と1955年の『甲南大学新聞』のインタビューに彼は軽口で応えているが(表1), 晩年はお風呂に入るよう, お手伝いさんによく諭されてもいたという。

道をはさんだ向かいの鳩貝耕一氏(甲南大学教授)は語る。すぐ近くに住む, 笑みを絶やさぬ荒勝文策学長とは対照的に, ユーバー先生はしかめっ面をしながら杖をついて, 一步一步講義に向かっていく⁴³⁾。三輪車に乗って見送る鳩貝氏にとって, 後にも先にも一度だけ, その先生が微笑みかけてくださったことが, 記憶の隅にうれしい思い出として焼きついているという。1960年頃の御伴は犬ではなく, 杖だったようだ。家屋は, 西欧風というよりはアメリカンな印象が強かった。鳩貝氏の8ミリ画像には屋根の一部とユーバーシャル邸の古くからの白い垣根, 台風で揺れるポプラとみられる大木が写る。大屋根の平屋で, 大学の筈曲部にかわったのちも窓は写真と同様, 開放された感じだった。「白い垣根が確認できれば, 決定的なのだが」, 写真4はおそらくユーバー邸だろうという。

荒勝学長は, 学園が1953年2月に建てた学長住宅に住んでいた。ユーバー邸は東洋紡績の敷地にあった⁴⁴⁾。北側の教会で最初に所在を伺った時, 招かれて来られた牧師さんだったが, 彼の存在を伝え聞いていた。つきあいは淡くても, 永くご近所に記憶され, 語り継がれる存在だったのだ。

3. 甲南学園のユーバー先生

1924年9月から始まった学園でのユーバーシャルのドイツ語教育は, 1965年1月に亡くなるまで40年以上にまたがる。うち①ライプツィヒ大学へ戻った約5年, ②再来日後の約2年, ③戦後1946年から1年3か月の間は学園に在職した形跡が見当たらない。しかしそうした期間も, 直接・間接, あるいは断続的に学園との関わりはあった。

ドイツへの旅立ち

彼のドイツ出発は, 『甲南学園50年史』の年表に「1932年3月10日 ドイツ語外人教師ユーバーシャルが「香取丸」に乗船, 帰国する」と記載される⁴⁵⁾。その少し前に撮影された旧制高校第7回卒業式の集合写真では(写真5), 学園の理事長・平生鈺三郎と丸山環校長と並んで, 中央にユーバーシャルが座り, 後ろに第7回の卒業生が並んで写る。彼は学園を去ったというより学園に見送られてドイツに旅立ったのであり, 将来の日独交流への期待が滲み出るものだった。

彼が乗った香取丸は, 日本郵船が経営する欧州航路の貨客船の一つで, 横浜・ロンドンの往復のため1913年に竣工した⁴⁶⁾。2週に1回横浜を出て, 神戸, 門司, 上海, 香港, シンガポール, マラッカ, コロンボ, アデン等からスエズを通過して, 地中海に入り, マルセイユ, ジブラルタル海峡を回って, ロンドンに到着する。



写真5 旧制甲南高校第7回卒業式

甲南学園史資料室蔵 前列中央にユーバーシャル、向かって右手に丸山環校長・平生夙三郎理事長が並んで座る
1932年3月初め

そこからアントワープ、ロッテルダム等に回航された。1916（大正5）年『日本郵船株式会社渡航案内』では、隔週金曜日が横浜発だった⁴⁷⁾。欧州航路がさかんになった1931（昭和6）年には、日本郵船『渡航案内』は改定新版されており、1932年10月の改定運賃表が赤字で挟み込まれた同冊子では、欧州航路は隔週月曜日横浜出発に変更され、水曜午後神戸に到着、「木曜午後三時出帆」⁴⁸⁾とある。神戸出港である木曜日は、先の学園史年表の年月日の曜日と符号する。注目すべきは、『渡航案内』に掲載される写真「歐洲航路船の神戸出帆光景」に写った埠頭の屋根が、ユーバーシャルの旧蔵写真（No. 90 写真6）のそれと一致する点だ。船上とテープでつながれた見送りの群衆のなかには、後部右手の一段高いところに笑顔で談笑する旧友・有馬頼吉の姿が見える。甲南の教え子であろうか、学生の姿も大勢写っている。

一方、写真7（No. 81）は、船上で花束をもって立つユーバーシャルである。その背景にもぼやけてはいるが、埠頭と同じ屋根が写る。ゆえに写真6・7は、

「1932年3月10日木曜日の午後3時前、神戸港を出港する香取丸の船上」から撮影されたものだったろう。

ライプツィヒ大学での教え子たち 日本の仲間に見送られてドイツに旅立った彼は、着任したライプツィヒ大学でも精力的に教育を行った。日本学講座では「日中関係」「日本語の散文」「日本語の書き言葉」「徳川期の散文」「鴨長明」「俳句・川柳」「日本の国土と人々」を、そして日本研究所では「日本事情」「満州事変」「日本の新聞購読」「日本社会史」などを講じていたという⁴⁹⁾。ドイツの各大学の日本学が総じて言語や古典に偏る傾向があったのにたいし、ライプツィヒ大学の日本学は、人文・社会と幅広く、時代も古代から近現代にまたがり、彼の構想がよく反映されていた⁵⁰⁾。アードラー（Walter Adler）は、1992年に亡くなった日本語学者・ヴェンク（Günther Wenck）の追悼文で、ともに若かりし頃、同大学のユーバーシャル教授のもとで学んだことを語っている（表2②）⁵¹⁾。二人は日本学と法学が学びたくて同大学を選んだ。彼は学ぶ者には惜しみなく機会をあたえ、教室外でも相



写真6 神戸港での見送り

1932年3月10日(木)の午後3時前、神戸港・香取丸の船上から見送りの人々を写す。向かって右手奥一段高くに笑顔の有馬頼吉の姿がある
(旧蔵写真：No. 90)

談にのった。留学の道をつけ、アードラーは1937年、東京帝国大学に留学し政治学を学んだ⁵²⁾。

その少し前には、1930年4月にライプツィヒ大学に入学し、のちに学園と深く関わることとなったビンケンシュタイン(ビンケンシュタイン, Rolf Binkenstein 1910-1985)が、彼のセミナーに参加していた。そして1933年9月、第1回目日独交換学生として日本に送られ、京都帝国大学に留学した⁵³⁾。1年の期間満了後さらに3年、国際文化振興会の奨学金をえて、同大学で考古学の濱田耕作、国語学の新村出の指導をうけ、沖繩文化・言語の研究を継続したという⁵⁴⁾。ユーバーシャルは、長いとはいえないライプツィヒでの在職期間中にも日独交流の担い手となる若き学者をこうして次々と育てていたのである。

フッパーのこと ユーバーシャルを介してライプツィヒ大学から甲南学園につながった注目すべき人物がもう一人いる。ライプツィヒ大学で言語と地理を学び、体操競技指導の課程を修めて1930年に来日したフッパー(Christian Hupfer 1906-1960)である。1920年代の後半、京都帝国大学でもドイツ文学の講師を勤めていたユーバーシャルは、1927年頃コメの農学研

究のため短期滞在していたラップ(Richard Lapp)と学生レベルの交流の必要性について合意し、1930年大阪毎日新聞社から財源をえてライプツィヒ大学と京都大学との交換留学を実現させた。京都大学文学部から卒業生2名が派遣され⁵⁵⁾、ライプツィヒ大学からの第一号がフッパーだった⁵⁶⁾。

彼は、2004年に市場俊之がとりあげるまで、長らく日本では忘れられていた存在だった。自らも体操選手として活躍し、体操スポーツ学を専門とする市場は、1932年のロサンゼルス・オリンピックに出場経験をもつ日本体操界の第一人者・本間茂雄が、東大阪の花園競技場で開催された学校対抗戦で1933年5月にフッパーと出会い、専門的な議論を交わしたことを紹介している。フッパーがちょうど甲南高校でドイツ語を教えていた時期だった。甲南同窓生の記憶語りでは、彼は日本人と変わらない身長で、柔道に興味があり、練習にきてはよく投げられていた印象が残されている(表2⑧)。渡独したユーバーシャルに代わり、彼は甲南高校でドイツ語を3年間⁵⁷⁾、1932年の1年間は大阪商科大学⁵⁸⁾でも講師を担当した。

フッパーは、日本のオリンピック参加に向けてドイ



写真7 船上で花束をもつユーバーシャール

1932年3月10日（木）午後3時前、神戸港・
香取丸の船上にて
（旧蔵写真：No. 81）

ツ体操を指導する役目を期待されて来日した人物だった。1931年6月27日の朝日新聞には、「体操の大手、フッパー氏来朝」として7月末から5日間の講習会が開かれる、とある。1932年のロサンゼルス・オリンピック出場を目前に、鞍馬などの指導が急遽進められたが、本番の大会ではアメリカの体操コーチが驚くほど旧式であったため（表2⑦）、高木コーチは「恥をかいた」と一時はフッパーを恨むほどに落胆した。1年の俄か作りでは、世界水準には到底届かなかったのである。

1936年3月から1937年1月、広田弘毅内閣のもとで文部大臣となった平生鈇三郎は、「我が紀元二千六百年といふ我國民の最も記念すべき年」⁶⁰⁾の1940年に東京オリンピック招致が正式決定したことをうけ、その準備を着々と進めていた。同じ頃、ライプツィヒ大学日本学研究所では、体育研究所・地理学研究所の協力をえてドイツ各方面の日本研究者を集め、1936年12月、6回におよぶ「日本と1940年のオリンピック東京大会」と題する講演会を開催している（読売新聞1936年

12月17日）。翌年出されたライプツィヒ大学体育研究所（編）1937『日本と1940年第12回オリンピック競技会』（独文）には⁶⁰⁾、ユーバーシャールの「日本人の特殊性」と題する論文が巻頭をなした。彼のライプツィヒでの活動は、文部大臣としての平生の活動時期と同調していたことがうかがえる。しかし、広田内閣は短命に終わり、東京オリンピックは時局に阻まれ、開催されることはなかった。

フッパーは、甲南高校のあと、1935-42年まで京城大学でドイツ語とラテン語を教えた。運動会では鉄棒の妙技を披露し、教師のリレーではフッパーの組が1位になるのが常だった⁶¹⁾（表2⑨）。1943年から神戸のドイツ領事館に勤めたフッパーは、ジャワに派遣され、日独海軍の通訳を務めていた。その時軍医となってジャワに勤務していた京城での教え子・手島皓一が偶然彼と出会ったエピソードを残している（表2⑩）。他方、有馬頼吉の子孫が作製した私家版の『有馬家の人々』には、芦屋の有馬家でユーバーシャールやフッパーらがよくお酒を飲みに来ていたことが回顧されている（表2⑪⑫）。戦後のフッパーはジャワのドイツ学校でドイツ語、地理、体育を教え、その後ドイツに戻った。甲南高校のドイツ語は、フッパーのあとシンチンガー（Robert Schinzingler）に、半年あいてヘルフリッチ（Franz Otto Hellfritsch）に、そして再びユーバーシャールに引き継がれることになった。

戦中戦後のユーバー先生

ユーバーシャールがドイツから再来日するのは1937年である。オランダからとるものもとりあえず戻ってきたとされるので⁶²⁾、ロッテルダムから船で神戸に戻ったのだろうか。その後、遅くとも1939年度には天理外国語学校で教壇に立っていた⁶³⁾。甲南高校に戻ったのは、教え子の村尾喜夫と偶然電車で出会ったことがきっかけだったようだが⁶⁴⁾、復職時期はドイツ語担当のヘルフリッチが任期途中で亡くなったことが関係したとみられる。その後ユーバーシャールはドイツが降伏した45年5月以降も、日本が負けた8月以降も甲南高校に在職していた。一方1946年から1年3カ月の間は在職記録がなく、『甲南大学新聞』118号には「終戦直後、駐留軍の日本語教師として働いていた」とある（表1）。駐留軍による送還者名簿が作成され、本国送還手続きが進められていた時期だったと思われる。

大阪・神戸総領事館（1937-39）を皮切りに、1943-44年に東京のドイツ大使館、1947年本国送還後、1951年に再来日、東京勤務をへて、ユーバーシャールの没

表2 ユーバーシャールと関連する人々の記憶語り *は筆者注記

No.	話者・書手	人物	内容	出典
①	佐多愛彦	大阪医科大学 (20年代初め) ユーバーシャール	日本の高等学校について、「吾が邦の高等学校は、独逸のオーベルシェールシューレよりも、更に現代化したものにして、這般の消息に精通する同僚ユーベルシェールは、本邦の高等学校は、其制度に於て独逸に優るものとし、唯だ其効果大に挙がらざるは、教員の力足らざるに基くとなせり。見るべし、如何に医育の準備に新氣運の動きつゝあるかを。」 p. 4	佐多愛彦(述) 1922「医界の革新気分」『医事公論』493
②	アードラー	ライプツィヒ大学 ユーバーシャール	1935-36年頃、ともにライプツィヒで学んだ日本語学者ヴェンクを偲ぶ追悼文：日本研究所長のユーバーシャールは、熱心に勉強に取り組む二人の姿勢を評価し、研究所の鍵をあて、土日も勉強に打ち込めるようにしてくれたり、講義以外でもよく相談に乗ってくれたり、尊敬する日本学者チェンバレンの著書をよく活用していたことなどを述べている。 S. 1-2	注51)
③	玉林憲義 旧制高知高校 2回文乙：1927(昭和2)卒	旧制高知高校 ヤコブ・ボーネルとその兄弟	「高知高校ゲルマニスト人脈」において、第2代ドイツ人講師：「第二代目はヤコブ・ボーネル先生で第一次欧州大戦に将校として参加された経験も良かった。先生はドイツへ帰られて教育行政家としての功績をつまれば高い官位をえられた。そのご兄弟は大阪外大に永い間おつとめで、日本研究の著書が多く「神皇正統記」その他の翻訳も出しておられた。もうひとりのご兄弟は松山高校におつとめでこの方も日本語に堪能でわれわれの学生のごころにでた「精神作興に関する詔書」のドイツ語訳をいち早く雑誌に発表しておられた。そしてこのご兄弟が日独戦争の捕虜として日本にこられ、それがご縁で、ヤコブ・ボーネル先生も来日されたということであった。」 pp. 468-469	旧制高知高等学校同窓会1972 『旧制高知高等学校五十年史』
④	同上	旧制高知高校 エーベルスマイヤー、ビンケンシュタイン、ユーバーシャールなど	第4-6代ドイツ人講師：「コンラーディー先生、エーベルスマイヤー先生については私は知るところがない。ビンケンシュタイン先生は、交換学生として京都大学へきておられたときから面識がある。京都大学＝ライプツィヒ大学の間でできた大阪毎日後援の交換学生制度の産みの親だったユーバーシャール先生にとくに親しくしておられた。戦争直後にアメリカに渡っておられたが、再び来日され、ユーバーシャール先生の老後をみておられた。その縁で今日も甲南大学にお勤めなのである。」 p. 469	同上
⑤	同上	旧制高知高校岸田晩節 15回文乙：1940(昭和15)卒	エーベルスマイヤーに習った学年：「つづく昭和十五年の文乙から東大へは鶴川義之助さんが進み、京大へは岸田晩節さんが進んだ。岸田さんは京都のせいもあって学部在学の頃から存じていたが情熱のある研究家で、ちょっと三高にもつとめられたが大阪市大の独文科の教授として、阪神ドイツ文学会のVIPである。日本独乙文学会の役員でもあり、理事会にでかけて正論を吐いてあとへひかない一言居士だといわれている。白髪を交えた頭髪はなかなかの威容でちょっとライオンみたいだ。」 p. 470	同上
⑥	前島郁雄	旧制弘前高校 ビンケンシュタイン	「弘高教壇に立った外国人教師像」において、「一九四五年九月、正確な日付は記憶にないが、授業をもち、所在ないビンケンシュタインが外国人教師館の前庭にいたのを二回ほど目撃したことがある。」 p. 151	注54)
⑦	高木武夫 ロサンゼルス・オリンピックの体操コーチ	ドイツ交換学生 フッパー	ロサンゼルス・オリンピックで日本選手の鞍馬が幼稚でアメリカのコーチが驚いたことにふれ、「昨年の暮(昭和6年)全日本体操聯盟の冬期講習で、独逸交換学生であるクリスチャン、フツパーなる者が、我等に鞍馬のスウイングの手解をして呉れたが、それは最も舊式のものだったのだと言はれ、耻を場所もあらうに、アメリカまで来てかかされやうとは何となさけないことだらうと、フツパー氏なる者を少なくとも恨んだのであつた。然し更にアメリカのコーチは辞を続けて、「誰れでも初めには何うしても、そのフランク式といふ階梯を通らねばならないのだ」と言つた。此言葉で私の心にあつた一抹の暗影は去つたのであつた。」 pp. 236-237	高木武夫1932 『体操競技』目黒書店
⑧	飯井寅太郎 旧制甲南高校 9回：1934(昭和9)卒	甲南高校 ドイツ人講師・フッパー	「独乙人の教師にクリスチャン・フッパーという日本人位しか身長のない人がいて、柔道に興味をもってよく道場へ練習に来たが、顔はやさしいのに腕や胸が毛むくじゃらで変な感じがしたこと、腕力はあつたが実に投げがかけやすく、気の毒な位ポンポン投げつけて日本人と欧米人との体格の相違を感じたことなども鮮やかに印象に残っている。」 p. 70	甲窓編集部(編)1969『甲窓』11(甲南学園創立50周年記念号)甲南大学同窓会
⑨	中沢貞治 元予科教授	京城帝国大学 予科 フッパー	フッパーさんは、日本語が上手で、名のとおり「跳びはねる人」だったこと、慶州での古蹟巡りでは予定した場所を一つ残らず回る几帳面さなどが記憶されるほか、最後にこう結ぶ。「若い仲間が集まっていたときのことです。何かの話から、〈ドイツとフランスの国境にある町が、戦争で所属が変わるごとに、町の呼び名が変わる〉と、フッパーさんは言いました。すると、誰かが「でも、京城は変わりませんよ」と応じたのです。「いや、取った人は、いつもそう言います」これがフッパーさんの言葉でした。当時は聞き流したのですが、やがて、それが現実のものとなりました。」 pp. 1-2	注61)

⑩	手島皓一（医16 1938年予科入学）	京城帝国大学 予科 フッパー	「フッパー先生とわたし」ではラテン語の試験と柔道の遠征が重なり、試験を免除してくれると思いきや、試験を1週間のばされ、困ったこと、試験はさぼってうけなかったため、ドイツ語で大いにしぼられ、最後に「ナチュリッヒ ヌル プンクト」（*当然零点）と告げられたのだけは嫌でもはっきり耳に入ったこと、柔道部長の先生に相談し、診断書を書いてもらってなんとか卒業できた、とある。そのフッパー先生と京城で別れ、軍医として勤務した赤道ジャワで1945年4月頃、柔道からの帰りに偶然再会した。その時、なぜジャワにきたのかを話してくれた。予科退職後、フッパーは神戸のドイツ領事館に勤務していた。当時、日本とドイツを結ぶただ一つの連絡路は潜水艦によるドイツとマレーシアのベナンだった。ベナンに来たドイツ潜水艦は静養のため、ジャワに来ていた。「それで先生は神戸の領事館から派遣されて、ジャワで日本海軍とドイツ海軍の通訳をしていたのです。」「約束していても、あの戦時中なかなか会えるものではないのに、よくも出会ったものだと思います。」 pp. 1-3	京城帝国大学・京城帝国大学予科同窓会事務局（編）1991『紺碧』111
⑪	柴田いと（有馬頼吉の末娘）	有馬頼吉郎 ユーバーシャール	「お酒はよう飲んでやった。ユーバーシャールが来たら、お母さんは明るく日、台所に行ってビールが何箱空いたか聞いてはった……」 p. 13	島崎千之・有馬成章ほか・いとこ会2014『有馬家の人々』（私家版）
⑫	島崎弘郎（有馬頼吉の孫）	有馬頼吉郎 フッパー、ユーバーシャール	「フッパ ドイツ人、背の高いウベヤック ハンガリー人 ヨットに載せに連れて行ってくれたわ。ユニバーシャル ユダヤ人 友達やね。ナチスから逃げて来た。なんで付き合いがあったのか。クレムト研究員。フッパにしても、ウベヤックにしてもワインやらビールやら飲みに来てたんやろうなあ。」	聞き手：島崎正聰・島崎愛子・築部ゆり（2016年12月聞き記録）

年を含む1963-73年まで大阪・神戸総領事を務めたガリンスキー（Wolfgang Galinsky 1910-98）は、在日ドイツ人の戦中戦後を次のように語っている⁶⁵⁾。東京では空襲のため、山梨の河口湖畔⁶⁶⁾に大使館職員の疎開がなされた。神戸の場合も空襲の被害を逃れて、疎開がなされた。近くには有馬や宝塚のような温泉地があり、サマーハウスをもつドイツ人や神戸の郊外に落ち着いた人もいた。終戦前に滞日していたドイツ人は、3000人内外いた。そのうち日本に残ることが許されたのは、1933年以前から日本にいたドイツ人やユダヤ系ドイツ人など700-800人だった。戦後処理は、ナチ党の幹部ら最初の輸送船が1947年2月に出航したのち、1947年8月には第2グループが船で、1948年4月に最後の20人が飛行機で輸送された。「反ナチだったことを証明できたドイツ人や、たとえばユダヤ人でナチの迫害を受けていたドイツ人が日本に残りました。さらに宣教師や修道女、そして、血縁関係で日本と結びつきが強い人々も残りました⁶⁷⁾と述べる。高知高校でドイツ語を教えた後、京都の独逸文化研究所に1947年までいたエーヴェルスマイアー（Bernd Eversmeyer 1906-1998）は、1947年は「アメリカ軍がすべてのドイツ国民を本国送還した年」で、1933年以後に日本にやってきたドイツ人は、「望むと望まざるとにかかわらず」、退去が決められたと述べている⁶⁸⁾。

ユーバーシャールは、1947年4月から再び学園の教壇に立った。彼は1933年以前から日本にいたドイツ人

だった。反ナチズムであった（あるいは「となった」）ことも教え子の記憶や戦後の新聞記事は間接的に伝えている。他方、旧友・有馬頼吉の孫が生前に語っていた「ユーバーシャール ユダヤ人 友達やね」（表2⑫）の真意は不明であるものの、当時の混沌・混乱・複雑さを伝えて余りある、捨て置けない語りとなっているのである。

教え子が語るユーバー先生

変わらぬ教育 甲南学園の学生たちが語ったユーバー先生については、表3のとおりである（写真8）。旧制・新制高校、大学とそこには一貫した教師像が浮かび上がる。意味のある、しかし当時はまったく理解できないフレーズを繰り返し暗記させ、「のどんこを振らすLの発音」（表3⑤）をはじめ、徹底した発音練習を特徴とした授業は、その厳しさと独特の教授法において、老いてなお鮮明な記憶を残すものだった。前稿でとりあげた新制高校卒の原靖氏の語りには小石を使った授業のくだりがあったように⁶⁹⁾、旧制の学生も（表3③）、ポケットから取り出した3つの小石を使って「珍無類のドイツ語会話でしぼられた」。巨体から教室中に轟くような声で発音を徹底され、暗誦したゲーテの詩は今も暗記して時々口をついて出るほどで、さぼる言い訳などまるで通用しなかった（表3⑨⑩⑪⑫⑬⑭）。

正田日出夫氏は、彼の人柄を痲痺もち、機嫌が悪い



写真8 学園でのユーバーシャール

甲南学園史資料室蔵 1930年旧制5回(理科)

と怒りだす「暴君」だが強く印象に残り、生徒にたいする情熱が強かったと述べる(表3⑮⑯)。氏は1935(昭和10)年生まれで新制甲南高校から甲南大学に学んだ。父は物理の教師として東京帝国大学から平生夙三郎に招かれた正田大で、甲南高校の教頭も務めた。そのため家族は1938(昭和13)年頃から学校の近くに暮らしていた。ドイツ語は高校・大学と「ユーバーさん」に習ったが、彼の話題を家ですることはなかった。当時は電話がない。家が近いので、自宅に教を乞いにいたり、教室で叱られた級友と一緒に謝りにいったこともあった。必修だったドイツ語を1年間お世話になって、「答案、どないでしたか」と先生に聞くと「まあまあやないか」「可」ではないが、「優」でもなかったと細やかに記憶する。

「自分は、政治は嫌いだ」ユーバーシャールは二つの戦争について多くを語らなかった。しかし彼の思想性がにじみ出た部分があったことを、教え子は記憶する。彼がライブツィヒから戻って、再び甲南高校の教壇に立った頃のこと、理科乙で授業をうけた津山直一は(表3⑧)、ナチスと思想を異にする彼の態度を敏感に感じ取った一人だった。きれいなドイツ文字で長

い独文を黒板に書かれ、翌週までに暗誦してくることを命じ、できない者は仮借なく叱りつけた。日本が参戦し、ドイツとともに枢軸同盟国として戦うようになった時、先生はドイツ人をもてはやす風潮には目もくれず、ただ「自分は、政治は嫌いだ」とだけいわれた。この頃から先生が暗誦させる文章が、カントの定言的命令の一節やゲーテの詩の類になっていたことを思うと、今にして思えば、当時の世相に抗する己の世界観を託されたのではなかったかと述べる。「おそらく反ナチズムだった」と推察するもう一人の回顧でも(表3⑨)、ゲーテの詩をドイツ書体で教えられた姿が記憶されていた。同盟国であったせいかドイツ語を第一外国語とする者が多かったなかでも(表3⑩)、授業姿勢が変わることはなかった。

ユーバーシャールに習ったドイツ語は大人になっても通用し、話すのに困らなかった。そのことは、黒崎勇氏をはじめ⁷⁰⁾、複数の生徒が語っている。ウィーンの図書館で俳句について聞かれた時、係の人はユーバーシャールを知っていた(表3①)。冒頭の「迎ればユーバー先生に！」は、そこでも経験されていたのである。

表3 甲南学園の教え子がとらえたユーパー先生 *は筆者注記。網掛けはユーパーシャルの渡独時期

No.	名前	学科 卒業年等	内 容	出典
①	杉田元宜	旧制1回：1926 (大正15) 理科卒	「四年の終りに動揺があった。何しろはじめての七年制で、はじめての私立高校が充足するのだから、結局は進学試験で級友の半ばは五年に進み、のこりと外から入ってきた人々とで高等科は発足した。しかし万事不備という所で、その中で理科では一年から物理があり、英語の原書が使われた。(中略) ユーパーシャル先生の授業では文科は加古、村尾、理科は加藤、池田、内田、大橋と私で計七人、この中いまのこっているのは村尾、杉田の二人だけである。おかげでヨーロッパを歩いても不自由しない。先日ウィンの科学アカデミーの図書で係の人に俳句のことを聞かれたが、この人は先生のことを知っていた。先生の著書がいま OAG に一つあるので、フィルムにとってウィンに送るつもりである。(中略) みんな老人になったが、人生に青春は何を以てしてもかえ難いものらしい。」p. 18	甲窓編集部(編)1969『甲窓』11(甲南学園創立50周年記念号)甲南大学同窓会
②	村上正	旧制2回：1927 (昭和2) 理科卒	「ドイツ語の池山先生が、放課後に、特別にやって下さった「歎異抄」の講義は、深い感銘を与えました。美しい低音で、御自分の独訳されたテキストが使われたお話ぶりは、之も亦生涯心の耳から離れないと思います。(中略) 音楽で、最も活躍したのは、貴志康一君でした。六回もドイツに留学しましたが、在学中でも、時々リサイタルを開いてくれましたし、神戸、大阪でも公開のリサイタルをやりました。(中略) なくなる前年芦屋の浜で会って握手をしたのが最後の別れでした。(中略) ユーパーシャル先生には直接教わりませんでした。最晩年の先生に偶然宝塚であったウイーン・フィルの夕にお出会いし、新しい若々しい学生にとり囲まれて、遅しかったあの頃とちがって、温和な好々爺になっていらっしゃるのをよそ乍らに見て、なつかしく思いました。」pp. 28-29	同上
③	山秋義雄	旧制2回：1927 (昭和2) 理科卒	「私は富山県人ですが、神戸の叔母を頼って、甲南高校高等科理科乙類へ選抜試験の上、入学許可された者であります。(中略) ドイツ語の先生は、独乙人ユーパーシャルという先生で、ゲーテの詩やツェッペリン飛行船の話をしたり、ポケットから小石を三個とり出して、その小石について珍無類のドイツ語会話でしぼられたことも覚えています。又、なつかしい恩師のお顔も思い出されます。まず神田先生(植物)、荒勝先生(物理)、高間先生(化学)、藤岡先生二人(数学哲学)、池山先生(ドイツ語)、堀田先生(ドイツ語)、高坂先生(ドイツ語)、野田先生(体操、剣道)、の面影が頭にちらついてなつかしい。」p. 31	同上
④	池内俊春	旧制7回：1932 (昭和7) 文科卒	「時にキャッチボールのお相手をさせられたり、先生の大切な実験道具をこわしたり、不逞な質問をして逆に尻もちをつかされたり、肩のフケをその腰の穢い長い手拭で少し払ったらどうだとからかわれたりしながら、お蔭で私は正田先生や堀田先生や村尾先生や、ユーパーシャル先生、岩崎先生、富士田先生、藤岡先生、野田先生、菅原先生、小野先生等々、忘れ得ぬ先生方を持つことができた。」p. 53	同上
⑤	岩佐俊吉	旧制9回：1934 (昭和9) 理科卒	「ユーパーシャル先生：待望の高等科になって帽子に白線を巻いてからは、急に大人になったような気がしたのですが、同時に授業もむずかしくなりました。語学はドイツ語を選ぶ者が多かったのですが、だいたい英語にいや気がした時分でしたから「メーチヘン」(*Mädchen 恋人) などというくすぐったいドイツ語を晴れて言えるところが魅力であったようでした。ところが現実にはそんな甘いものではなく、当時京大講師で来日中のオットーゲオルグヨハネスハンスユーパーシャルという長い名前先生が、ドイツ人独特の気まじめさで、各人の目の前に立ってのどろんこを振わずエル音を、気にするまで直されるという力の入れ方でした。それはまだよいとして毎週月曜の先生の時間までに、難かしいドイツ文の暗誦をしてゆかねばならぬには閉口しました。意味もなにも分らずに棒暗記するわけですが、あとで気がついたらその文句はカントの哲学「純粹理性批判」の冒頭文でした。独文法と和訳は小柄で謹厳な堀田先生に教わりましたが、独訳に「モデルネン、メーチヘン」というのが出てきて一同始めてわが意を得たりの感を深くしたものでした。」p. 69	同上
⑥	進藤琢蔵	旧制9回：1934 (昭和9) 理科卒	「藤岡先生の数学、堀田先生、村尾先生、殊にユーパーシャル先生の独乙語、どれをみても立派な講義だったと思います。」p. 75	同上
⑦	西直彦	旧制10回：1935 (昭和10) 文科卒	「また当時、部では名士招待講演会を催し、私の在学中には成瀬無極先生、武者小路実篤先生などが来られた。ドイツの文化使節エドゥアルト・シュブランガー博士を迎えたときは、私はすでに甲南高校を卒業していたが、聴講する機会を得た。」その時平生先生の寿像の前でとった記念写真にはドイツ語のシンチンガー先生などの顔がみえ、「まことに懐しい。」p. 81。『甲南学園50年史』の年表にもとつくと、写真の撮影日は1937年6月16日、ユーパーシャルの再来日前とみられる	同上；注4) 甲南学園50年史出版委員会、p. 856

⑧ 津山直一	旧制18回：1943 (昭和18) 理科卒	「ユーバーシャル先生の思い出：(前略) 昭和七年一度ドイツに帰られたが、ナチスと思想を異にされる先生は数年で日本に帰り来られ、再び教壇に立たれた。筆者はそのころ旧制甲南高校理科乙類でドイツ語の授業を受けた者である。先生の授業は極めて厳格で毎回黒板に長い独文をきれいなドイツ文字で書かれ、それを次の授業までに暗誦して来ることを命じられ、できない者は仮借なく叱りつけられた。やがて日本が参戦しドイツと共に枢軸同盟国として戦うようになった時、先生はドイツ人を持てはやす風潮には目もくれず、ただ「自分は政治は嫌いだ」とだけ言われた。しかし、そのころから学生に暗誦させられる文章が「汝の意思を律するものが常に普遍妥当の真理たり得る如く行動せよ」と言うカントの定言的命令の一節であったり、「東の国、はた西の国、北の国、はた南の国、なべて神造り賜えるものなれば、その御手の安らぎのうちに憩うなり」と言うゲーテの詩の類になって行ったことは今にして思えば、先生が当時の世相に抗する己れの世界観を託されたのではなかったかと考えられるのである。先生は終生娶られず孤独のうちに亡くなられた。先生の愛弟子小沢凱夫大阪大名誉教授に伝えられた遺言では、自分の愛した甲南大学の見える丘に葬り、墓碑銘はただ「始めに言葉ありき」の一行のみ彫れと言われた由である。」 pp. 152-153	①と同じ；津山直一 1965『日本医事新報』2154, p. 6の記事の再録
⑨ 作者不明	1939年11月末-1945年頃	生徒の回想に残る二人のドイツ語の先生。我々は両先生に感謝し、かつ誇りに思う。お二人とも恐らく反ナチズムだった。氷上先生は文法とニイチェの「悲劇と誕生」の理解を教えられた。ユーバーシャル先生は発音を徹底的に矯正され、その声は隣の教室まで鳴り響いた。先生はゲーテの詩をドイツ書体で教えられた。p. 11	甲南学園同窓会2005『旧制甲南高校生我が師・我が友・我が運動部、文化部』
⑩ 大島哲男	旧制20回：1945 (昭和20) 理科卒	「同盟国がドイツであったせいか乙類のドイツ語を第一外国語に選ぶものが多く甲類はわずか七人しかいなかった。この語学の先生には物故された方が多く、ドイツ語のユーバーシャル、中島先生、英語の寺井先生など何かと思い出のある講義であった。」 p. 162	①と同じ
⑪ 山田弘之助	旧制21回：1946 (昭和21) 文科卒	「文一の新学期が初まると、ハンス・ユーバーシャル先生の独乙語の発音、氷上英広先生の独乙語の文法に悩まされました。」 p. 170	同上
⑫ 石山太郎	旧制24回：1949 (昭和24) 理科卒	「ドイツ語で忘れ難いのはユーバーシャル先生である。巨体から発する教室中に轟くような声で、熱心に授業された面影が今でも目に浮ぶ。先生が教えて下さった Goethe の“Gingo biloba”(銀杏) という愛の詩は若かった私に強い印象を与えた。今でもこの詩は暗記していて時々口をついて出てくる。」 p. 201	同上
⑬ 田中(旧姓上仲) 黎子	文学部5回：1959 (昭和34) 卒	「当時一番の楽しみは、なんといっても、高名な先生方の講義をきくことだった。(中略) 故ユーバーシャル教授の“ホイテ・イスト・ムンターク”にはじまり“アウフビーダーゼーン”で終わる独会話―(中略) どの講義も、どの先生方のお声も、いまもいまもハッキリわたくしの耳の底にのこっている。」 p. 254	同上
⑭ 岡本博	経済学部6回：1960 (昭和35) 卒	「甲南の思い出」といわれても、ことほどさように学校へは余りいかなかった。(中略) 成績などというものは「どの程度理解しているか」できめるものであって、授業に出席していたかどうかで決めるべきものではない、ましてや「どうやって理解したか」などはこと更問題でない―というのが当時の私の言い分であった。この論法でおし通したが、したがってユーバーシャル先生と後記の「体操」にはよわかったわけである。」 p. 263	同上
⑮ 正田日出夫	新制甲南高校卒/ 経済学部4回：1958 (昭和33) 卒	人柄のこと：「ユーバーさん、ものすごく立派なんやけど、癩癩もちでね、とにかく変わった人で、ワンマンなんです。機嫌悪かったら、ものすごく怒り出す。それでほくも勉強がわからんときに、“よろしいですか”というて、放課後いったら、“いいよ”とおっしゃってくれました。ものすごく厳しかった。男性上位とかね、熱心な教師でした。授業中しゃべるとご機嫌が悪い、チョークをポーンと投げる。“なにしとんや”いうて、最後まで謝っても絶対だめや、そういう人でした。それで、夕方、ほくの友達が怒られたとき、“謝ったらどうや”、“いこう”いうて、連れて行ったら、先生“なんできたんや”いうて。謝ったらわかってくれて、どういふか暴君、けどものすごく印象に残る。生徒にたいする情熱がごっつありましたな。」	2021年2月筆者聞き書き
⑯ 同上	同上	試験のこと：「試験も厳しいんですよ、自分でもものすごく練った試験がでる。これはあかん、それで機嫌のよさそうなときに“教えてください”というてそのまま出るわけ。ハハハ、面白いでしょ。頭かきながらいくとね、教えてくれる。けどこっちが強気でいくとね、相手はおれが偉いんやという、なんともいえんね。学生にたいする情熱はある。よくしてやろうというね、でも今ではああいう先生は少ないと思いますね。今やったらいろいろいわれるでしょ、生徒からもね。」	同上

晩年のユーバー先生 1951（昭和26）年4月、甲南大学文理学部が発足した。旧制高校で彼の教え子だった村尾喜夫が独乙語担当教授となり、非常勤講師にはユーバーシャールを含む4名が加わり、独乙語を担当した。当時の外国語科目は、英語8単位、独乙語8単位が設けられ、ドイツ語の比重が高かった。1954年には「独乙文学」の担当者に新たに教授としてユーバーシャールが加わった。「その講義は厳格であり、ゲーテやシラーの詩を音吐朗朗と講読する形式のもので、卒業生のなかには、今なおこの講義に深い印象を語るものが多い」とある⁷¹。1954年7月7日の『甲南大学新聞』9号には、若くして死んだドイツ抒情詩人・トラクル（Georg Trakl）を彼が紹介した文⁷²が載る。和訳された数少ない、戦後の彼の思索を知る文章である。また1952年に大阪市立大学で阪神ドイツ文学会設立案が決定されると、彼は同学会において1955年に「シラーの物語詩」の朗読、1958年に「日本人のドイツ語学習者のための音声学的提案」の口頭発表、1959年にシラーの頌歌「歓喜によせて」の朗読をしている⁷³。永年の彼の教育と呼応する晩年の研究会活動だった。大学では、1961年（昭和36）になると「独乙文学講読」を担当した。翌年から独乙語はドイツ語へと改称された。戦後のユーバーシャールは、政治との関わりを避け、日本で生きる覚悟とともに、日本人のためのドイツ語・ドイツ文学者であることを選んだのであろう。それは彼の軌跡を辿れば必然だったのだろうか。老境にあった彼の講義は冒頭の西田英樹らが補佐した。学生たちの記憶には、ユーバー先生の側を寄り添って歩く教え子たちの姿が残像となって残されていた。

よく犬を連れて山へ行ったり、六甲を歩き回ったり、浜まで歩いて泳ぎに行ったり、一人でヨットを楽しんだりしていたユーバーシャールも、晩年の脳内出血で視覚が狭くなり、歩行や好きな読書もあまりできなくなった。それでも休暇中も厭わず毎日大学に登校することを習慣にしていた⁷⁴。「私の授業計画には大学祭による休講は含まれていない」。そんな厳格さを自身の日常でも貫いていたのである。

4. 学園葬ともう一つの墓

ユーバー先生は、1965（昭和40）年1月8日に救急車で運ばれ、1月21日神戸海星病院で亡くなった。救急車で運ばれたのを隣家の前田氏の父は日記につけていた。向かいの鳩貝氏は、小学3年生のある日、お通

ΞΥ ΑΡΧΗ ΗΡ Ο ΛΟΓΟΣ

先生の自筆墓碑銘 “始めに言葉ありき”

写真9 学校葬式次第の自筆文字（1965年）

甲南学園史資料室蔵 神戸外国人墓地の墓碑銘と同じ、ユーバーシャール自筆 2022年9月撮影

夜かお葬式だったか自宅で営まれているのに家族が気づき、母親と一緒に参列した⁷⁵。神戸市立外国人墓地にあるユーバーシャールの墓は、亡くなってすぐ西ドイツ領事によって建てられた。1965年1月21日神戸海星病院で没、23日夢野火葬許可書をもって、1965年3月4日埋葬され、ドイツの領事館扱いになっているという。埋葬までの間に学園葬が1965年2月14日、甲南大学2号館で執り行われた。資料室にはその時の式次第「故ユーバーシャール教授告别式」が残されている。3つ折りの扉を開くと、右手に本、左手に眼鏡をもち、笑みを浮かべたユーバー先生が中央に立っている。右頁の略歴で注目されるのは、最後に「なお御遺族として御令妹のゲルトルート・ユーバーシャールさんが西ドイツのポッフム市に在住」とある点だ。彼の旧蔵写真には、妹とみられる女性の写真が複数含まれることから、今後この名前が日独を橋渡す手掛かりになるとよい。さらに中扉には「先生の自筆墓碑銘“始めに言葉ありき”」がギリシャ文字で記されているのも注目される（写真9）。これは、神戸市立外国人墓地の墓碑に刻まれたものと同じ書体である⁷⁶。すなわち生前、彼はこの言葉を自筆で残し、遺志として墓に刻むよう伝えていたのだった。

学園葬は、学園歌・開式の辞に始まり、黙祷や弔辞に続き、ゲーテの一節を朗読する故先生のお声（録音）、献花と別離の歌・献花等でしめくくられた。集まった関係者は600人余り、弔辞は大学開設以来学長を務めていた原子物理学者の荒勝文策、ドイツ国総領事のガ

リンスキー、教職員代表の教授・村尾喜夫、OAG代表でかつて甲南高校でも教鞭をとったシンチンガー、友人代表のフジセック博士、ドイツ文学科教授のビンケンシュタイン、本学卒業生代表の黒崎勇、在学生代表の山口裕之、そして最後を大阪大学代表として医学部教授の小沢凱夫が務めた。このうちのフジセック博士とは、かつて有馬頼吉が所長を務めた大阪市立刀根山療養所の嘱託医師で⁷⁷⁾、神戸万国病院(のちの神戸海星病院)等の医師だった Robert Hudcsek のことであろう。また最後の小沢凱夫は、表3⑧の津山の語りにおいて「先生の愛弟子」とある。1913年9月大阪高等医学校に入学していた小沢は、従軍前のユーパーシャルに教わったか、面識をもったもっとも初期の学生だった。小沢による医学校時代の回顧では、前稿で論じた予科教授の北里闌を敬愛する様子が語られ、北里が晩年に手掛けた『高崎正風先生伝記』の出版実現に黙って尽力するなど、終生強い子弟関係があった⁷⁸⁾。他方1922年来日したザクセン出身のドイツ人医学者・ヘルテルの後を継ぎ、大阪医科大学(現・大阪大学医学部)の外科教室を率いたのが小沢であった。ユーパーシャルはこの小沢に甲南大学の見える丘の墓と墓碑銘の遺言を伝えていたという。以上のように日独の教え子や同僚・仲間に見送られた学園葬は、彼の生き方がよく表れた告別式だったと想像する。

もう一つの墓をめぐる

「ドナルド・キーンとモラエスの間がない、ユーパーシャルはその間を埋めることになったはず。自分も少し調べたことがある」と彼の晩年を知る隣家の前田氏は語っている。モラエスの故郷リスボンに足を運んだこともあるという。第一次世界大戦前に神戸の領事を務め、日本人と暮らし、『徳島の盆踊り』など数々の作品を残して徳島で亡くなったポルトガル生まれのモラエス、戦間期に壮年時代を過ごし、ドイツ人への日本学と日本人へのドイツ語教育を通して日独交流に尽したドイツ生まれのユーパーシャル、戦中・戦後より日本研究と日本の幅広い文学を欧米へ紹介し、日本国籍を取得したアメリカ生まれのキーンは、国も生き方も異なるが、いずれも日本を研究し、日本で没した人たちだった。学園の貴志康一記念室には、1935(昭和10)年7月12日東京でモラエス7回忌の追悼講演会を知らせるハガキが残される。当日は著作・遺品展もあり、戦前にはなおモラエスの功績がこのように大々的なセレモニーとして開催される程関心を集めていたのだろう。

「自分の墓は甲南学園が見える所がよい」とユーパーシャルは生前語っていた。そのことは、教え子の村尾嘉夫も追悼論文集で記している⁷⁹⁾。しかし彼の墓は神戸市立外国人墓地にあることから、その希望はてっきり実現されなかったものと筆者は想像していた。ところが、前田氏は「すぐ近くにユーパーさんの墓がある」という。裏山の光明寺の墓地と記憶される場所に早速一緒に出かけたところ、墓は見当たらなかった。妹に連絡をとってくださると、妹の記憶にもある。光明寺では墓の管理に年間の維持費をとるようになり、前田家は10数年前に墓じまいをしたという。改めて光明寺の住職に尋ねると、「ユーパーシャルの墓はうちにはない。ビンケンさんの葬式はしましたよ」とのことだった。ビンケンさんとは、本論に登場するビンケンスタインのことで、筆者は遅まきながらこの時彼の存在を知った。

改めて北に位置する明王院に尋ねてみると、確かにあったという。住職によれば、鈴木学長の時に墓碑は建立されたが、学長が亡くなって久しく、誰も参ることがなくなった。しばらく持ち主への掲示をだしていたが、訪れる人もなく、合祀した供養塔を建てたあとに墓碑は処分したという。鈴木学長とは、1972年2月～1975年2月まで学長だった独文学科の鈴木正治のことだろう。墓碑が処分されたのは10数年前のことだった。その後、筆者の前稿を読まれた甲南大学の鳩貝氏から2006年撮影の墓碑写真を送って頂いた(写真10)。碑がなくなる少し前とみられる。彼の遺志は実現され、墓碑は写真の通りに存在していた。近所の方々の記憶のそばに立てば、そこは確かに学園を見下ろす場所だった(写真11)。

1965年9月、学園は彼の家を含む借地を東洋紡績から購入した。没後1、2年、家は空家として放置され、近所の子供たちの遊び場となっていた。当時、欧米スタイルの家は珍しく、異国の地で遊んでいるような気分だったという。しばらくして和風に改装され、門は閉ざされ、遊べなくなった。ユーパー邸の庭にあった、10mを超すほどのポプラの大木は、鳩貝氏の祖父の申し入れて切り倒された⁸⁰⁾。国土地理院の1960年代の空中写真には、道路際に数本の高木が長い影を落としていたが、1970年代のそれにはなくなっている⁸¹⁾。和風の建物からは、箏曲部のお琴の練習が聞こえるようになった。これはこれで隣家にとっては騒音で、部室は移動し、テニスコートになった。その後土地は売却され、近年マンションになった。

再び、教え子・ビンケンスタイン ユーパー先生の



写真10 もう一つの墓碑

明王院の墓地にあったユーバーシャルの墓碑 2006年10月鳩貝耕一撮影



写真11 ユーバーシャルの墓碑があった場所

墓碑のあった場所近くに立つと、甲南学園を見下ろしていた 2021年2月撮影

墓をめぐる聞き取りのなかで、筆者が知りえたビンケンスタインは、短期間（1938年9月～1939年1月）⁸²⁾だが、旧制高知高等学校でドイツ語を教えていた。その後名古屋高等学校（第八高等学校）をへて、1942年4月から1945年9月⁸³⁾まで弘前高等学校でドイツ語講師となった。当時在校生だった前島は、戦時下の弘前高校では、学生も2年生は1945年3月には繰り上げ

卒業、4月から新2年生は多賀日立工場へ動員され、学校は留守、1年生は7月入学という変則的な年だった、5月にドイツは降伏したため、彼による授業はなかったと思われるが、いつ、彼が弘前を離れたのか、離日の日も判然としないと語る⁸⁴⁾。旧制歴代ドイツ語教師のなかでもっとも日本に通じていると思われたビンケンスタインが1945年9月、授業をもたず、所在な

げに外国人教師館の前庭にいたのを前島は記憶に留めていた(表2⑥)。彼は1947年に本国送還後、再び大学で学び、ミュンヘン大学で学位を取得したのちアメリカに渡った。甲南大学には1962年からドイツ語講師に、1964年にはユーバーシャルの後任教授となった。彼の退職が1965年3月に予定されていたのだろう。その上で1年早い後任人事だったと思われる。ライブツィヒでユーバーシャルに日本学を学んだビンケンスタインは甲南で後継となり、晩年の彼を支えたのである。

ビンケンスタインは、1930・40年代の戦前・戦中に琉球・沖縄研究、甲南大学在職中の60年代後半にはアイヌや出雲の地名研究に精力を傾けた。沖縄出身でアメリカ在住の琉球・日本学者である山口栄鉄は、イギリスのチェンバレンなど欧米での琉球・日本研究を「欧文日本学」と名付け、その十分な検討をせずして、これからの琉球・日本学はないと言い切っている⁸⁵⁾。ユーバーシャルは尊敬する日本学者・チェンバレンの著書をライブツィヒ大学での講義によく用いていたことをアードラーは述べており(表2②)、ビンケンスタインもその啓発をうけた一人だった。今日、日本では国際日本学という学部設立が関東・関西の大学で進められ、日本学の再編も進んでいる。それらがどんな方向にむかうにせよ、欧文日本学を含む、近代に蓄積された日本学の検証は今後も避けては通れない課題であろう。

「ドイツ語、ドイツをやっていた人は、ユーバー先生に辿りつく」。冒頭で示したこの言葉は、氏の一貫した教育姿勢が、偶然を必然にかえ、記憶すべき伝承の基軸を生んだことを意味していた。日本人へのドイツ語教育、ドイツ人への日本学教育は、彼自身が学び、練り上げた教育の形であり、彼が実現した数々の留学制度の根幹をなすものだった。他方、人生を省みれば、自ら独語訳を手掛けた松尾芭蕉の『奥の細道』の冒頭にあるように、旅を栖とし、旅に死した人生だったともいえる。はや紙面は尽きた。貴志康一、有馬頼吉などその繋がりはまだ十分とりあげられてはいない。ユーバーシャルを辿った先には、筆者の父・岸田晩節もいた。旧制高知高校では、ビンケンスタインのあとにエーヴェルスマイヤー(自身はエーバスマイヤーと表記)がドイツ語を教えていた。父は、彼にドイツ語を習った1940(昭和15)年乙卒で、玉林の記憶語りに「ちょっとライオンみたい」とあるのが父である(表2⑤)。戦後再来日したエーバスマイヤーとは晩年まで親交があった。ユーバーシャルの旧蔵写真と若

干の新たな資料を導き手に、あともう少しだけ先へ進む。

注

- 1) 出口晶子 2021「Dr. ユーバーシャルの日本学と教育・研究の軌跡—平生日記その他」『甲南大学紀要文学編』171: 287-317
- 2) 上掲1) p. 311; 岩本哲「ユーバーシャル先生の思い出, ベルリンの壁」http://grosselehrer.web.fc2.com/06.5.22_ueberschar.htm, 【2023年11月24日閲覧】
- 3) 筆記体の解読できない部分は、田野大輔甲南大学教授にご教示いただいた
- 4) 前掲1), p. 301(右段)で筆者が甲南高校の入学時期を9月としたのは誤りで、正しくは4月。初年度1923年は4月開校, 入学式は5月1日。甲南学園50年史出版委員会(編)1971『甲南学園50年史』甲南学園, pp. 846-847
- 5) 毛利真人 2006『貴志康一 永遠の青年音楽家』国書刊行会, p. 61
- 6) 増井敬二(著)昭和音楽大学オペラ研究所(編)2003『日本オペラ史~1952』水曜社, p. 189; 大阪朝日新聞1925年3月19日など
- 7) 根岸一美 2012『ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団』大阪大学出版会, p. 1
- 8) 前掲7), p. 96
- 9) 甲南学園史資料室, 1925(大正14)年4月『生徒名簿』甲南高等学校
- 10) 甲南学園貴志康一記念室所蔵
- 11) 貴志の伝記や活動については、以下のような先行研究がある。日下徳一 2001『貴志康一—よみがえる天折の天才』音楽之友社; 藤井ちえ・岩井正浩 2002「貴志康一の活動に関する一考察: 日本洋楽史における位置づけ」『神戸大学発達科学部研究紀要』9(2): 151-169; 前掲5); 梶野絵奈/長木誠司/ヘルマン・ゴチェフスキ(編著)2011『貴志康一と音楽の近代—ベルリン・フィルを指揮した日本人』青弓社など
- 12) 前掲7) p. 96
- 13) 甲南学園史資料室, 『甲南学園職員勤続調』1917(大正7)年12月20日設置以降。着任時の辞令は1924年8月31日で授業は2学期から。甲南学園50年史出版委員会(編)1970『甲南学園50年史 図録』甲南学園, pp. 98-99
- 14) 甲南高校蔵, 『退学者』綴
- 15) 注11) 中村仁 2011「ベルリンの日本人—貴志康一と「日本」の表象」梶野絵奈ほか(編著), pp. 72-86
- 16) 前掲1) p. 303
- 17) 「阪神間モダニズム」展実行委員会(編)1997『阪神間モダニズム』淡交社, p. 58 写真
- 18) 上掲17) p. 8 ポスター
- 19) 佐多愛彦 1908「都市と田園附市外生活の幸福」高田兼吉(編)『市外居住のすゝめ』p. 23
- 20) 小口千明 1985「日本における海水浴の受容と明治期の海水浴」『人文地理』37(3), pp. 27, 33

- 21) 高梨光司 1940『佐多愛彦先生伝』佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会, p. 693
- 22) 上掲21); 山本ゆかり 2007「阿部元太郎による近代郊外住宅地開発—松風山荘住宅地を事例として」『日本建築学会計画系論文集』618: 123-127
- 23) 前掲21) p. 695
- 24) 国指定重要文化財。ライトの海外作品として将来のユネスコ世界遺産追加登録候補
- 25) 前掲21) p. 695
- 26) 平生日記18巻中, 4巻以外の1-15巻に佐多の記述がある。1936年3月7日-38年1月17日までの日記は不明だが, 総じて佐多への関心は高く, 交流は長く続いた
- 27) 甲南学園平生鈞三郎日記編集委員会(編) 2020『平生鈞三郎日記』補巻, 甲南学園; 2015『平生鈞三郎日記』11巻, 甲南学園, p. 84
- 28) 浦和男 2021「浜寺公園の宮武外骨」『大阪春秋』181: 50-51
- 29) 公益社団法人医学振興協会(編) 2022『大阪大学医学部の歩み(第2版)』p. 9
- 30) 前掲19) p. 25
- 31) 市居義彬 1983『谷崎潤一郎の阪神時代』曙文庫, p. 75
- 32) 朝日新聞社阪神支局(編) 1975『阪神再見』中外書房, p. 13には大正末期建設とある。他方, 当支配人・金子六郎編の月刊誌 1935『パインクレスト』(関西大学総合図書館蔵) 40号では, 1935年4月16日を開業4周年記念日と述べる。そのため, 本稿は1931(昭和6)年開業とした
- 33) <https://iif.nichibun.ac.jp/YSD/detail/005515937.html>, 【2023年11月24日閲覧】
- 34) 富田昭次 2003『ホテルと日本近代』青弓社, pp. 242-243
- 35) 5月はほぼ毎日50室以上が埋まっている
- 36) 金子六郎 1935「パインクレストは中庸の道を歩く」『パインクレスト』ホテルパインクレスト, 45, pp. 10-13
- 37) 金子六郎 1935『松丘句集』パインクレスト松丘句会, p. 7
- 38) 前掲32) 朝日新聞社阪神支局; 旧パインクレスト | にしのみやデジタルアーカイブ (archives.nishi.or.jp) 【2023年9月10日閲覧】
- 39) 西宮市 1967『西宮市史』7巻, p. 390
- 40) 運輸省観光部(編) 1949『日本ホテル略史誌』, pp. 127-128
- 41) <https://maps.gsi.go.jp/> 【2023年11月23日閲覧】
- 42) 1914年, 兵器輸入に関わる日本海軍の汚職事件としてシーメンス事件がおこると, 家は放置され, 空襲にもあった。戦後廃墟が残っていたが, 跡地一帯はヘルマンハイツの名で高級住宅地となった。2023年, コミュニティバスはヘルマンバスと名付けられている
- 43) 鳩貝耕一 2006「Another Konanzuke Story2」『情報教育研究センターニュースレター』2, 甲南大学
- 44) 甲南大学創立30周年記念事業委員会(編) 1984『甲南大学の30年—研究・教育の歩み』甲南大学, pp. 550, 569; 前掲4) 甲南学園50年史出版委員会, p. 117
- 45) 前掲4) 甲南学園50年史出版委員会, p. 851
- 46) 財団法人日本経営史研究所(編) 1988『日本郵船株式会社百年史』日本郵船, p. 178
- 47) 荒山正彦(監修・解説) 2015『日本郵船株式会社渡航案内/埃及見物/渡欧案内/欧洲大陸旅行日程/郵船の世界一周』ゆまに書房, p. 12
- 48) 日本郵船 1931『渡欧案内』p. 21
- 49) 小川蒼子美 2010『欧州における戦前の日本語講座』風間書房, pp. 21, 197。なお, ライプツィヒ大学日本研究所は, 甲南大学紀要追悼号では日本文化研究所, 新聞その他では日本学研究所と訳される場合がある
- 50) 恒木健太郎 2018「日本学をめぐる「対獨文化工作」の動向—「全獨日本人文化事業関係者會議ニ關スル報告書(1936年)について」『人文科学年報』(専修大学) 48, p. 161
- 51) Adler, W. 1993 „Persönliche Erinnerungen an Professor Dr. Günther Wenck“ *NOAG* 152, S. 1-3
- 52) 上掲51) S. 2; 上田浩二・荒井訓 2003『戦時下日本のドイツ人たち』集英社新書, pp. 40-41
- 53) 1975「ロルフ・ビンケンスタイン教授略歴」『甲南大学紀要文学編』19, p. 1
- 54) 前島郁雄 2005「弘高教壇に立った外国人教師像」旧制弘前高等学校同窓会(編)『旧制弘前高等学校史』弘前大学出版会, p. 150
- 55) 京都帝国大学文学部(編) 1935『京都帝国大学文学部三十周年史』p. 311
- 56) Ichiba, T. 2004 „Ein bisher unbeachtetes Leben : Christian Hupfer“ Hofmann, A. R./M. Krüger (Hrsg.) *Südwestdeutsche Turner in der Emigration*, Hofmann, S. 243-252
- 57) 期間は1932年3月31日~1935年3月31日, 甲南学園史資料室『教職員名簿』; 『同窓会・校友会会員名簿』
- 58) 藤本周一 2007「戦前昭和期に大阪府下の学校等(旧学制)に勤務した外国人教師について(その1)」『大阪経大論集』58(5), pp. 199-120
- 59) 平生文部大臣(述) 1936『オリムピック東京開催と我國民の覚悟』文部省, p. 8
- 60) 前掲1) 表1 ⑩
- 61) 中沢貞治 1990「思い出のフッパーさん」京城帝国大学・京城帝国大学予科同窓会(編)『紺碧』105, p. 1
- 62) 黒崎勇 2002「定年・停年・諦念」『言語と文化(甲南大学国際言語文化センター紀要)』6, p. 12
- 63) 1940・1941年度『天理外国語学校一覧』で確認できるほか, 1942・1944年度『天理外国語学校一覧』には1942年3月までの旧職員とある(昭和17年度, p. 91; 昭和19年, p. 93)。1938・1939年度の資料は所在不明。1965年の学校葬の式次第, 同年『甲南大学新聞』118号にもとづけば, 遅くとも1939年には同学校で勤めていたとみられる
- 64) 『甲南大学新聞』118, 1965年3月27日
- 65) Ehmcke, F./ P. Pantzer (Hrsg.) 2000 *Gelebte Zeit-*

- geschichte Alltag von Deutschen in Japan 1923-1947. iudicium*, S. 134-143; 荒井訓 2000 「終戦前滞日ドイツ人の体験(2)―「終戦前滞日ドイツ人メモワール聞き取り調査」『文化論集』16, 早稲田商学同攻会, pp. 137-148. 戦争のために10年間日本に留まり, 帰国した時は難民, 失業者になっていた。ポーランド領になった故郷シュレージェンには戻れず, 生れて初めて行ったドイツ西部では当然ながら土地の女性たちのなかからすぐ結婚相手を見つけることはできなかった。ガリンスキーは退職後も神戸に居住し, 98年の終戦日に没した
- 66) 1944年12月, 河口湖富士ビューホテルでは独乙人協会が, 神戸六甲山ホテルでも阪神独乙人協会が借上げ使用のため, 一般営業を休止している。前掲40) p. 29
- 67) 前掲65) Ehmcke, F./ P. Pantzer, S. 143; 荒井 p. 147
- 68) 前掲65) Ehmcke, F./ P. Pantzer, S. 13; 荒井訓 2002 「終戦前滞日ドイツ人の体験(4)―「終戦前滞日ドイツ人メモワール聞き取り調査」『文化論集』20, 早稲田商学同攻会, p. 88
- 69) 前掲1) p. 312
- 70) 前掲62) p. 15
- 71) 前掲44) 1984, pp. 53-55
- 72) 岩子良一(訳)。トラークルは第一次大戦に参戦し, 27歳で生涯を終えた表現主義の詩人
- 73) 阪神ドイツ文学会(編) 1963 「阪神ドイツ文学会総会・研究発表会・講演会等記録(昭和27-37年)」『ドイツ文学論攷』4, pp. 125-127
- 74) 前掲64)
- 75) 鳩貝耕一 2007 「Another Konanzuke Story 4」『情報教育研究センターニュースレター』4, 甲南大学
- 76) 前掲1) p. 313
- 77) 藤本周一 2008 「戦前昭和期に大阪府下の学校等(旧学制)に勤務した外国人教師について(その3・完)」『大阪経大論集』59(1), p. 105
- 78) 小沢凱夫 1959 「回想」大阪大学医学部第一外科同窓会(編)『小沢凱夫教授定年退官記念教室業績集』pp. 4-5; 福田義文 1979 「小沢凱夫氏の恩師・北里闌氏並びに父君・小沢太郎平氏について」大阪大学医学部第一外科学教室・大阪大学医学部第一外科同窓会(編)『小沢凱夫先生追想録』pp. 137-146, 375 (年譜)
- 79) 村尾嘉夫 1968 「ユーバーシャール先生の思い出」『甲南大学文学会論集』37; なお前掲1) 筆者論文(p. 317)の注内容は, 126) 前掲116)が正しく, 上記出典をさす
- 80) 前掲75)
- 81) 前掲41)
- 82) 依岡隆児 2011 「旧制高等学校ドイツ人講師の見た四国」『言語文化研究』19, p. 43
- 83) 前掲53); 54) p. 147
- 84) 前掲54) p. 151
- 85) 山口栄鉄 2010 『英人日本学者チェンバレンの研究―〈欧文日本学〉より観た再評価』沖積舎など。山口は, 戦中に沖縄に赴いて研究し, 沖縄・奄美の古謡おもろに最初の全巻注釈を刊行した鳥越憲三郎の功績を正しく評価する志からその評伝にも取り組んでいる。山口栄鉄 2007 『琉球おもろ学者 鳥越憲三郎』琉球新報社